２０２４年度
コミュニティ・スクール意識調査

１．調査の目的

全国的にコミュニティ・スクール（以下コミスク）の導入が進む中、明石市では2019年度から小学校に、2020年度には中学校にコミスクが導入されました。

導入後、小学校では２年目、中学校では１年目にあたる2020年度（令和2年度）にコミスクのスタート時点での本市の現状を把握するため「コミスクに関する意識調査」を実施しました。

この間、コロナ禍の影響もあり、学校間により進捗には差がありますが、徐々に地域とつながった取り組みが動き始めています。

そこで、前回のアンケート実施から3年がたった現段階で、コミスクについてについての管理職、教職員及び児童・生徒、そして新たに保護者・地域も対象としての意識調査を行い現段階での状況・課題を把握し、今後の取り組みにいかしていきたいと考えています。

また、コミスクについての意識調査をとおして、新学習指導要領の実現に向けて、学校の教育的使命と社会的使命について熟議を深めるきっかけになればと考えています。

２．調査期間

（１）管理職用アンケート
2024年5月10日（金）～2024年6月7日（金）

（２）教職員用アンケート
2024年5月10日（金）～2024年6月7日（金）

（３）指導主事用アンケート
2024年5月10日（金）～2024年6月7日（金）

（４）小学6年生）・中学３年生アンケート
2024年5月10日（金）～2024年6月7日（金）

（５）保護者・地域住民アンケート
2024年5月10日（金）～2024年7月1日（月）

明石市教育委員会学校教育課

目　次

１．管理職・教職員　・・・・・・・・・　２

２．指導主事　・・・・・・・・・　２２

３．児童・生徒　・・・・・・・・・　２６

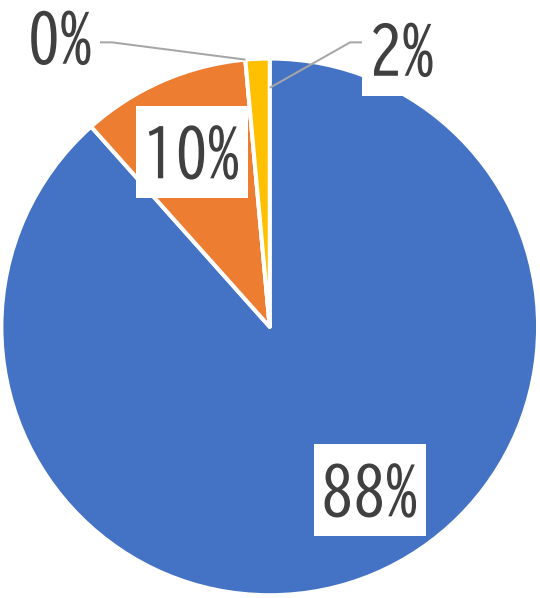
４．保護者・地域住民　・・・・・・・・・　３９

【管理職】＆【教職員】

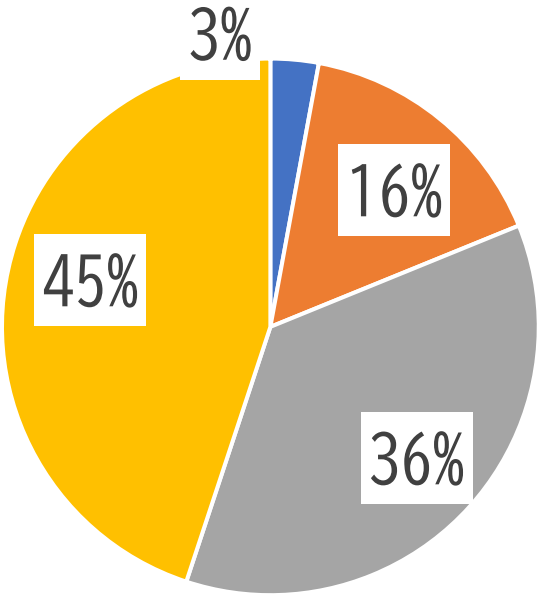
回答率　校長：100%　　教頭：66%

回答率　小学校教職員：44%
　　中学校教職員：38%

【学校運営協議会の運営について】
Q1. 学校運営協議会のメンバーには、学校長・教頭も入っている。

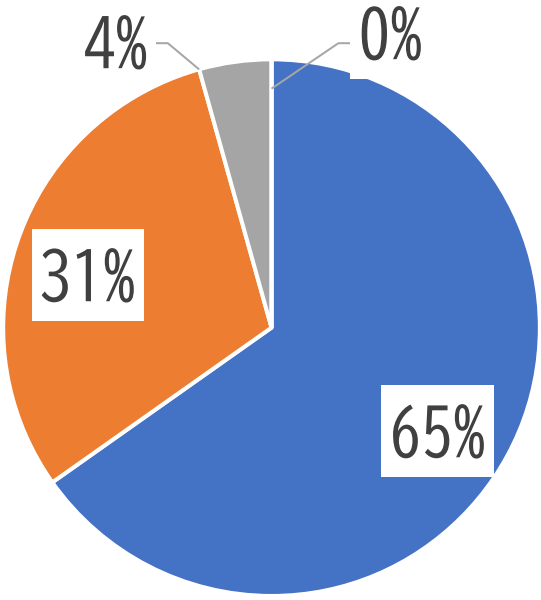


【学校運営協議会の運営について】
Q2. 学校運営協議会の委員選定にあたって公募をおこなっている。

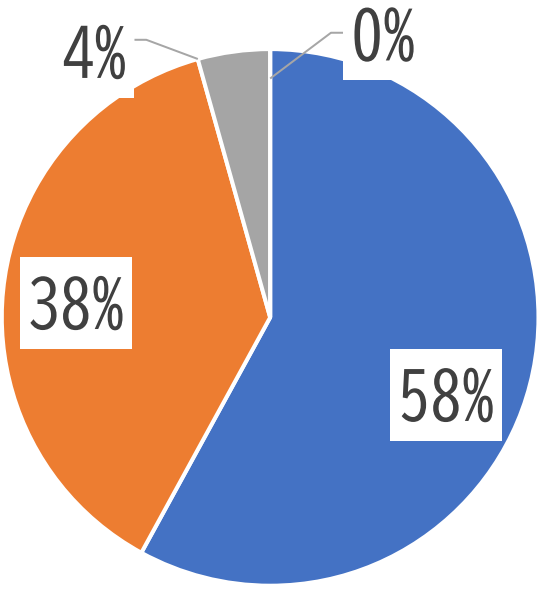


よくあてはまる　あまりあてはまらない
ややあてはまる　まったくあてはまらない

【学校運営協議会の運営について】
Q3. 学校運営協議会において幅広く柔軟に熟議ができるよう委員選定にあたっては配慮している。

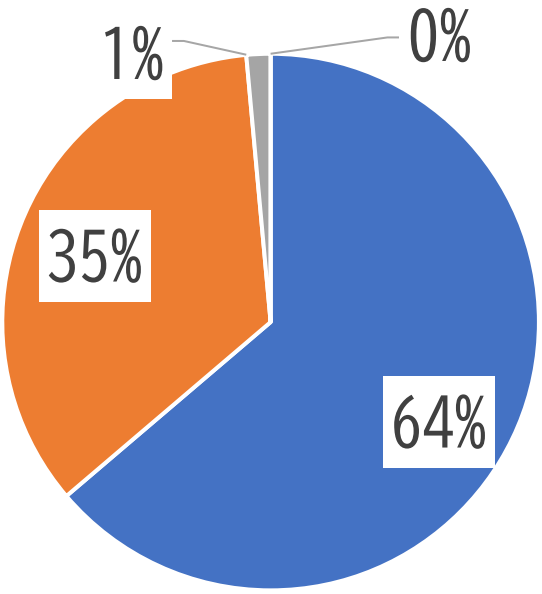


【学校運営協議会の運営について】
Q4. 学校運営協議会において「学校教育目標」や「めざす子ども像」等について熟議している。

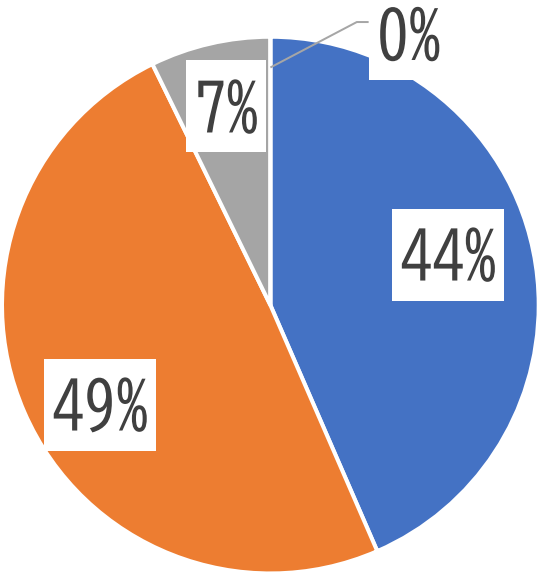


よくあてはまる　あまりあてはまらない
ややあてはまる　まったくあてはまらない

【学校運営協議会の運営について】
Q5. 学校運営協議会において学校や子どもの課題等について熟議している。

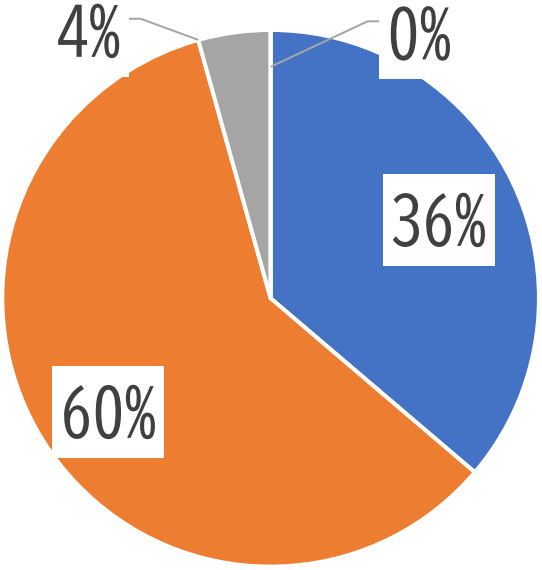


【学校運営協議会の運営について】
Q6. 学校運営協議会において学校の課題等だけでなく、地域や家庭の課題等についても熟議している。

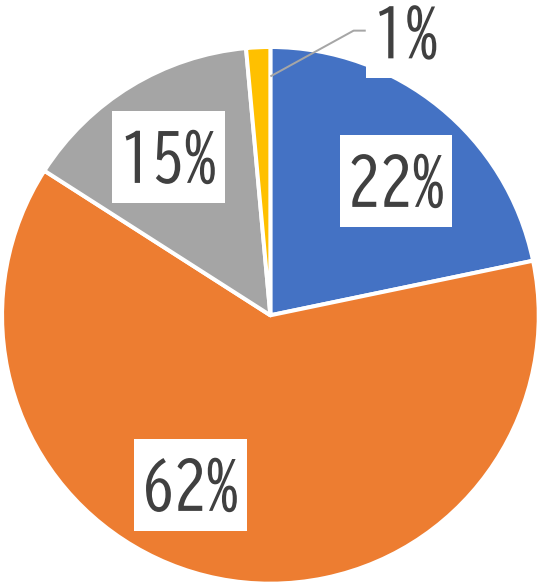


よくあてはまる　あまりあてはまらない
ややあてはまる　まったくあてはまらない

【学校運営協議会の運営について】
Q7. 学校運営協議会において熟議されたことが、学校運営に反映されている。



【学校運営協議会の運営について】
Q8. 学校運営協議会でコミスクの推進に向け、補助金の活用について熟議している。



よくあてはまる　あまりあてはまらない
ややあてはまる　まったくあてはまらない

①「学校運営協議会のメンバーには、学校長や教頭も入っている。」に関して、ほとんどの回答者が「よくあてはまる」と回答しています。これは、学校長や教頭が協議会のメンバーとして適切に参加していることを示しています。

②「学校運営協議会の委員選定にあたって公募をおこなっている。」に関して、回答者の大部分が「あまりあてはまらない」または「まったくあてはまらない」と回答しています。これは、公募制度等を活用し、多様な人材を選んでいこうという意識がまだまだ低いことを示しています。

③「学校運営協議会において幅広く柔軟に熟議ができるよう委員選定にあたっては配慮している。」に関して、大部分の回答者が「よくあてはまる」と回答しています。これは協議会の委員選定において幅広い意見を取り入れる配慮がされていることを示しています。

④「学校運営協議会において「学校教育目標」や「めざす子ども像」等について熟議している。」に関して、大部分の回答者が「よくあてはまる」と回答しています。これは協議会が学校の教育目標や子ども像について熟議していることを示しています。

⑤「学校運営協議会において学校や子どもの課題等について熟議してる。」に関して、大部分の回答者が「よくあてはまる」と回答しています。これは協議会が学校や子どもの課題について熟議していることを示しています。

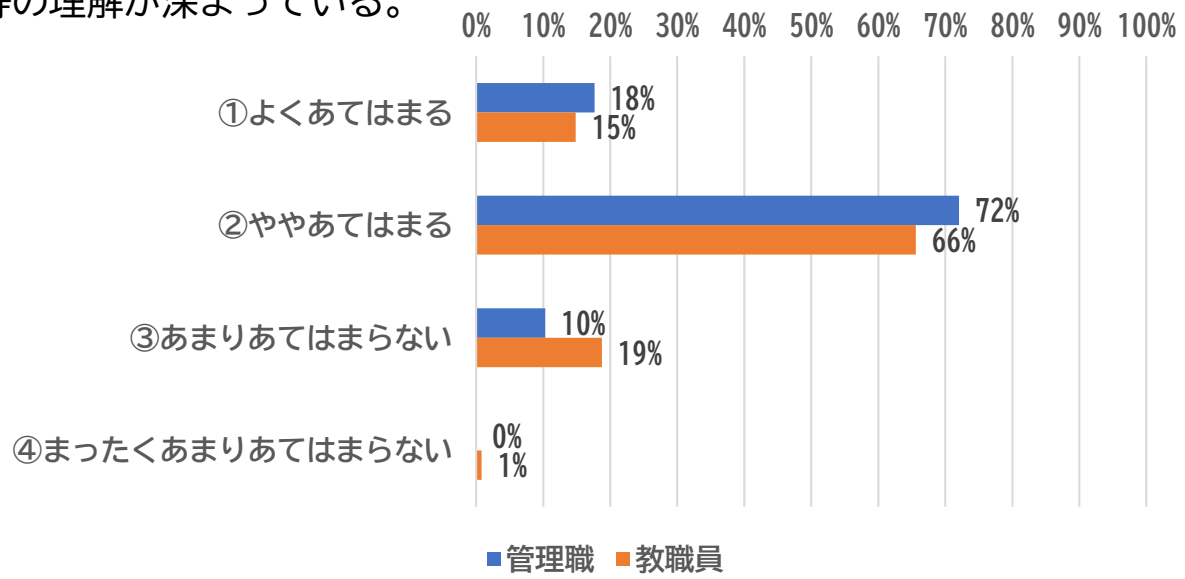
⑥「学校運営協議会において学校の課題等だけでなく、地域や家庭の課題等についても熟議している。」に関して、大部分の回答者が「ややあてはまる」と回答しています。学校運営協議会において、地域や家庭の課題について熟議はおこなっているが、まだまだ十分でないということが分かります。

⑦「学校運営協議会において熟議されたことが、学校運営に反映されている。」に関して、大部分の回答者が「ややあてはまる」と回答しています。これは熟議された意見や提案が学校の運営に反映することは大切でであるが、十分に反映されていないことを示しています。

⑧「学校運営協議会でコミスクの推進に向け、補助金の活用について熟議している。」に関して、大部分の回答者が「ややあてはまる」と消極的肯定回答です。これはコミスクの推進や補助金の活用に関して改善の余地があることを示しています。

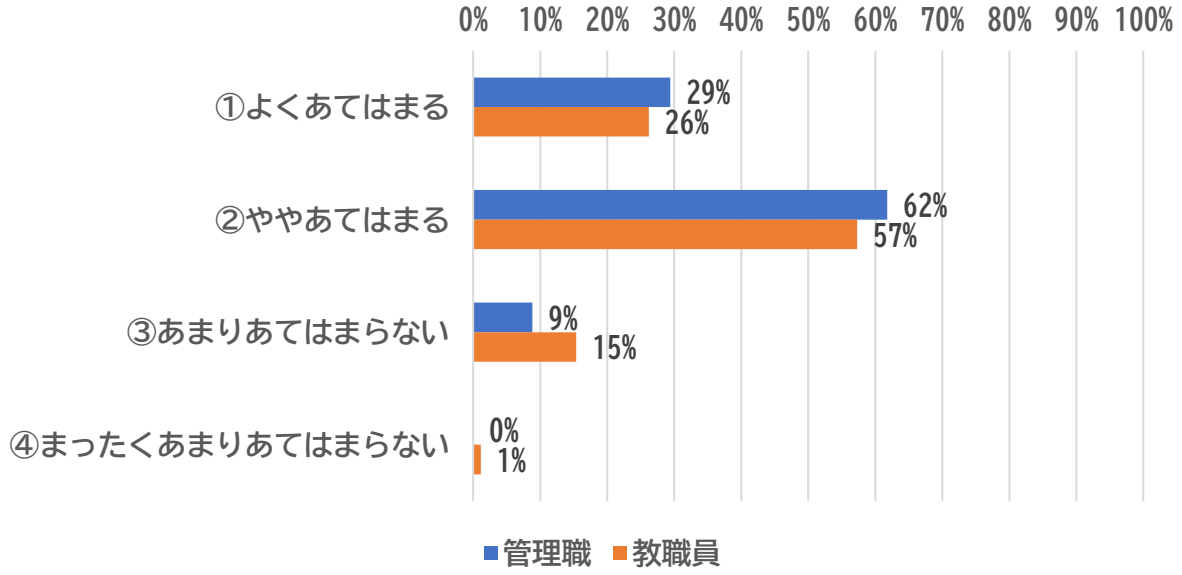
アンケートの結果から、学校運営協議会がコミスクの運営において重要であることは認識されています。しかし、まだ十分に学校運営協議会が機能していないところがあります。学校運営協議会を機能させていくためには、「なぜ今、コミスクなのか」というコミスクの役割を学校運営協議会や教職員同士、学校・家庭・地域で対話を進め、コミスクの理解を深めることが必要です。まずは、「なんちゃってコミスク」になっていないか、形骸化していないかを再確認することが重要です。

【「社会に開かれた教育課程」の実現に向けての取組について】
Q1. あなたの学校では、「社会に開かれた教育課程」の実現に向け、学習指導要領の理念等の理解が深まっている。



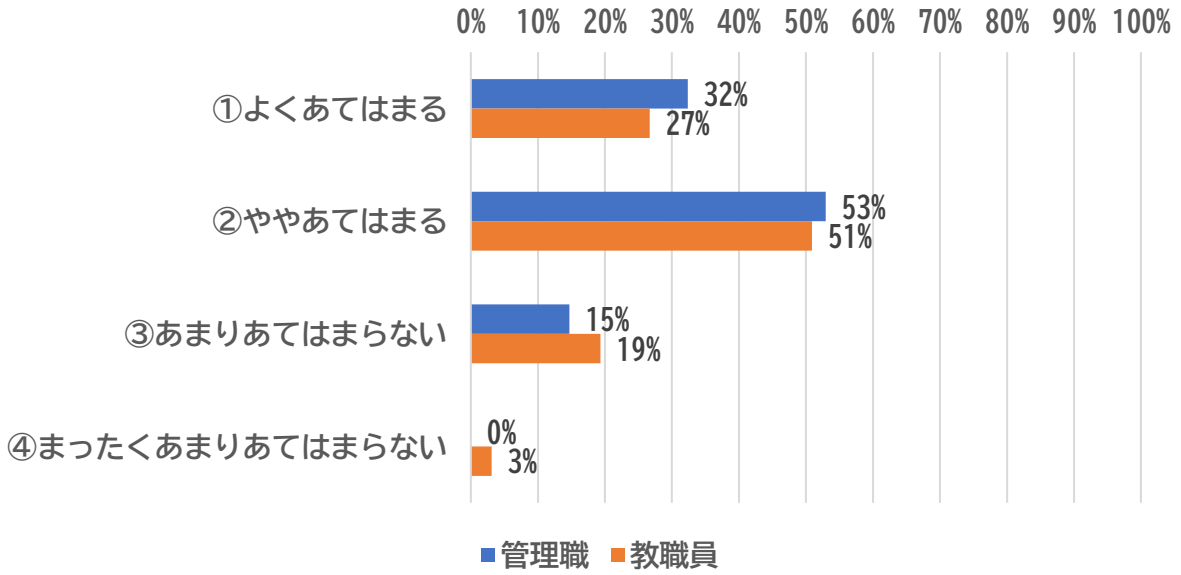
管理職と教職員の両方において、消極的肯定回答が多数を占めており、教職員の約2割が否定的な回答をしています。この結果から、学校の中でも「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて、学習指導要領の理念等の共有がすすまないまま、具体的な取り組みに結びついていない現状があると思われます。

【「社会に開かれた教育課程」の実現に向けての取組について】
Q2. あなたの学校では、教職員間で未来を担う子どもの育成やこれからの学校づくり等についてよく対話がおこなわれている。



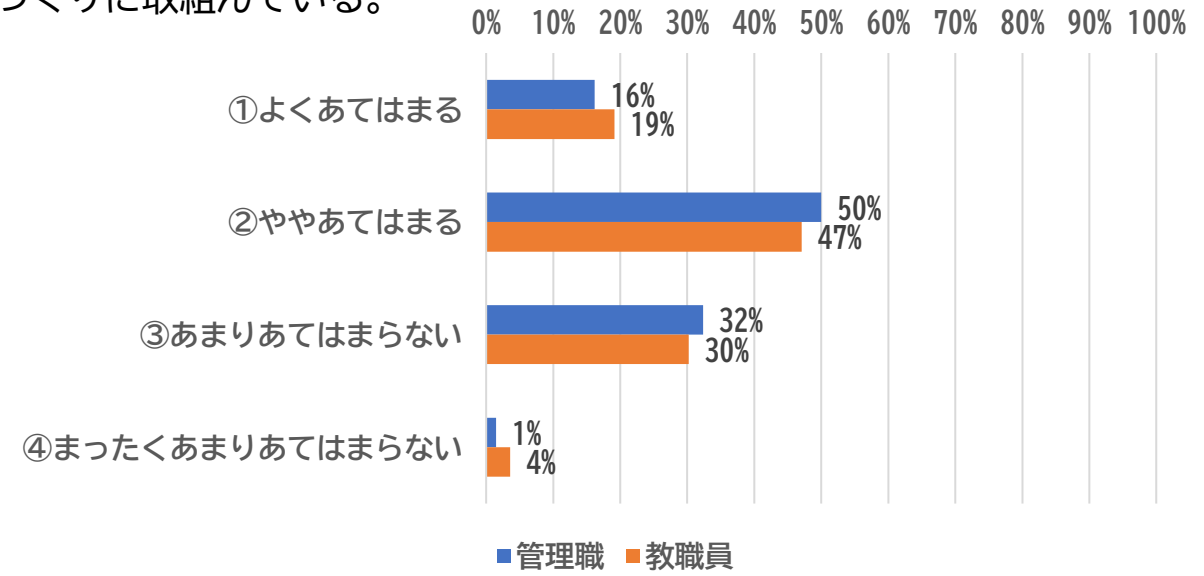
これもＱ１と同様、消極的肯定が多数であり、未来を担う子どもの育成や学校づくりについて対話が進んでいるとは言い切れないのが現状です。目の前の課題等に向けてのコミュニケーションだけでなく、未来を視野に入れた対話も必要です。対話の中で、教職員が未来をイメージし、その未来に向けてクリエイティブになっていくことが期待されます。

【「社会に開かれた教育課程」の実現に向けての取組について】
Q3. あなたの学校では、地域教材や地域人材を活かした授業をおこなっている。



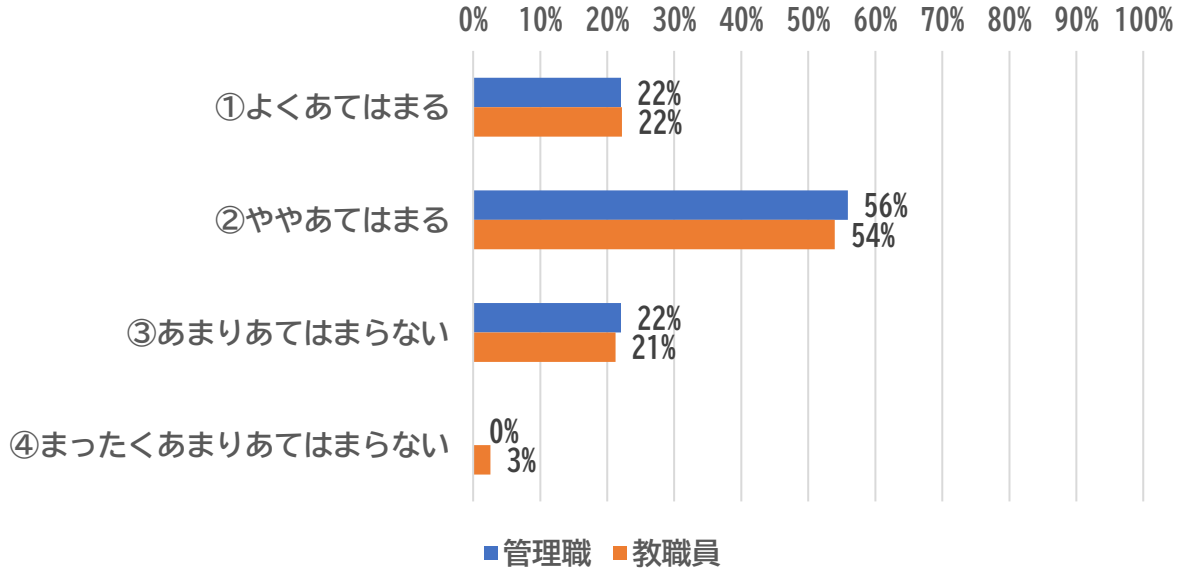
地域教材や地域人材を取り入れることには、「①子どもたちの学びの意欲を高めることができる　②地域と学校のつながりを深めることができる　③地域資源の活用や地域振興に寄与することができる」といったような意義と価値があります。
しかし、学校間や学校内での意見・意識の差があり、対話や研修を通じて理解を深める必要があります。地域教材や地域人材の活用は、子どもたちの学びを実践的にし、社会とのつながりを考える上で重要です。

【「社会に開かれた教育課程」の実現に向けての取組について】
Q4. あなたの学校では、保護者や地域住民等と一緒に「地域とつながった」カリキュラムづくりに取組んでいる。



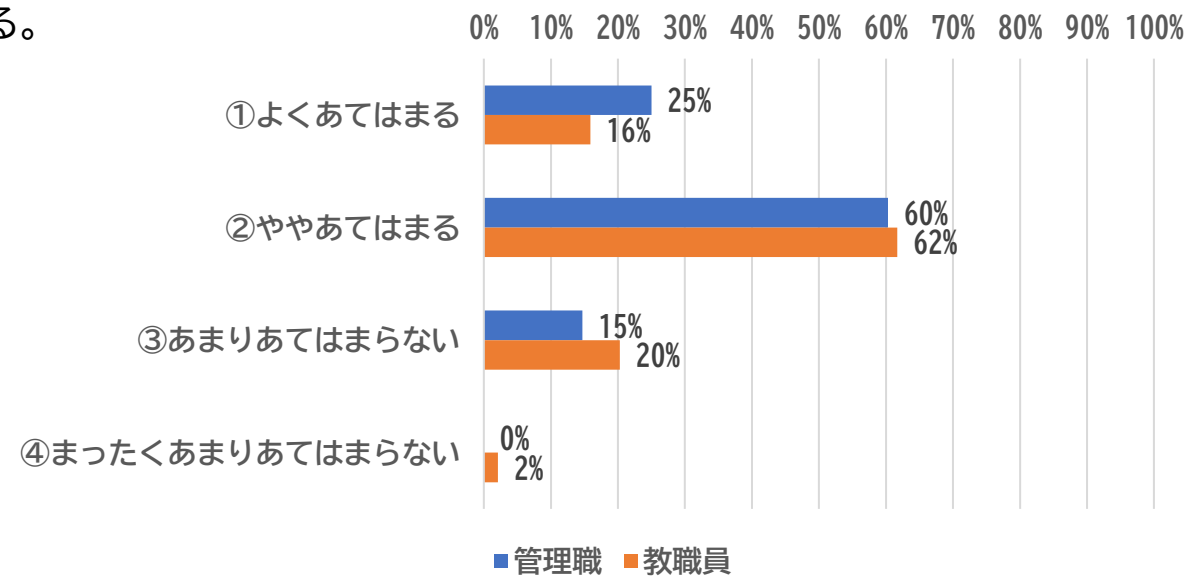
管理職・教職員の半数が消極的な肯定回答で、否定的回答が3割以上を占める状況から、地域教材や地域人材を活かした学びに対する取り組みが進んでいないことがわかります。この現状を踏まえて、「地域を学ぶ」意義や価値を考え、保護者や地域住民との対話を通じて地域に根ざしたカリキュラムづくりに取り組む必要があります。地域を通して社会を見る目を育てるためには、地域に根ざしたカリキュラムづくりが必要です。

【「社会に開かれた教育課程」の実現に向けての取組について】
Q5. あなたの学校では、教科横断的なカリキュラムづくりに取組んでいる。



管理職・教職員の半数が消極的肯定回答であり、2割が否定的回答である背景には、「教科横断的」の理解がまだ十分ではないと考えられます。本時の授業に焦点を当てた研究から単元・カリキュラムレベルの視点を向けた研究へ、そして子どもが育つしくみづくりへと研究の視点を転換していくことが必要です。未来を創る人を育てると意識が、これからの教育の質を向上させることにつながります。

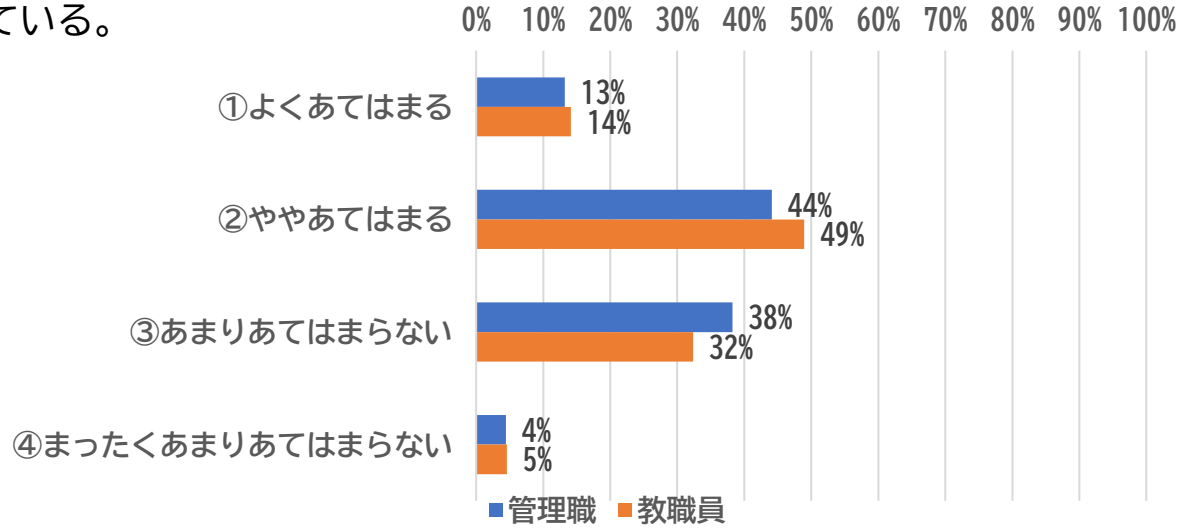
【「社会に開かれた教育課程」の実現に向けての取組について】
Q6/あなたの学校では、PDCAにもとづいた、カリキュラム・マネジメントをおこなっている。



管理職・教職員の6割が消極的肯定、2割が否定的な回答という結果から、カリキュラム・マネジメントの理解が不十分であると考えられます。まずは学校教育目標につながる子どもの諸活動の経験をグランドデザイン化するなど、子どもたちの学びや成長の過程を具体的に見える化することが必要です。そのことで、学校教育目標に基づいて、子どもたちがどのような経験を積むべきかを明確にし、それをカリキュラムとしてデザインしていくことにつながります。これにより、教職員は学習活動や教育プログラムを計画し、実施する際に目標達成を意識することができるようになります。

【「社会に開かれた教育課程」の実現に向けての取組について】

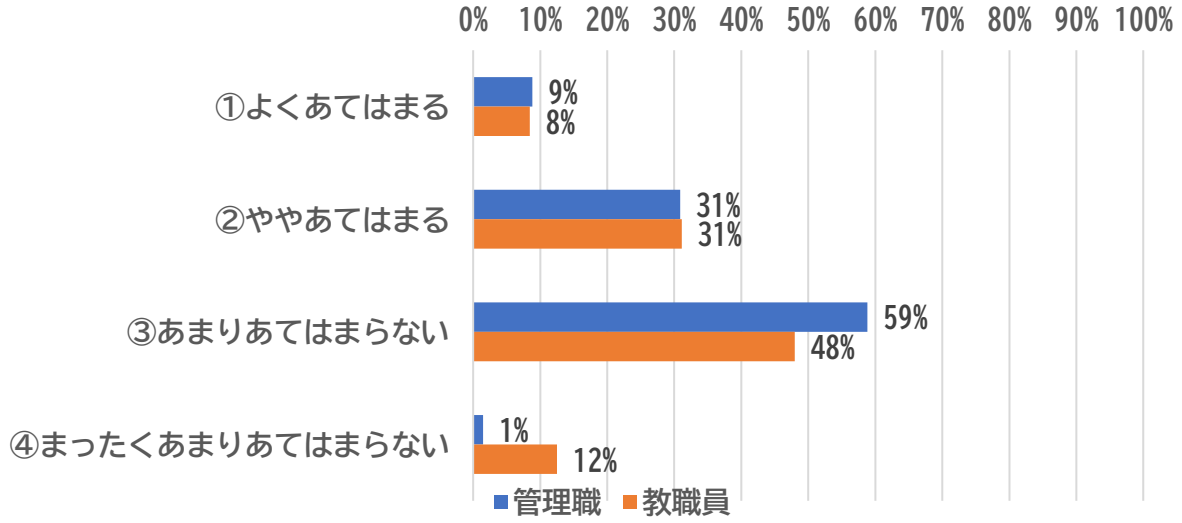
Q7. あなたの学校では、外部人材と一緒に探究的な学びを意識した単元開発をおこなっている。



まだまだ多くの学校では消極的な傾向があることがわかります。再度、「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて、学習指導要領の理念や目的の理解を深めるために、なぜ外部人材との協力が必要なのか、なぜ探究的な学びが必要なのかといった本質的な対話が必要です。学習指導要領の理念等の理解を深め、共有することで、教育の目的や意義を再確認し、外部人材との協力や探究的な学びが子どもたちの成長や学びにどのようにつながっていくか具体的なイメージを持つことにつながります。

【コミスクの推進について】

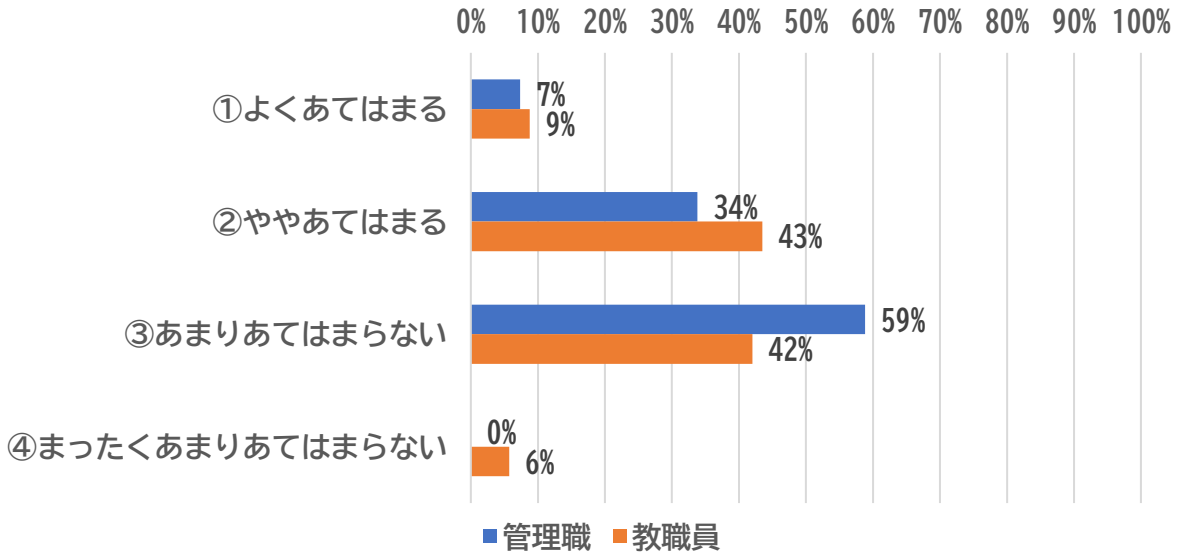
Q8. あなたの学校では、教職員間でコミスクがよく話題になっている。



管理職・教職員の半数以上が否定的な回答であり、自由記述でも「働き方改革に逆行する」といった意見が見られるなど、コミスクに対する消極的な姿勢が強いと推測します。こうした課題を乗り越えていくためには、学習指導要領の理念に再度立ち返り、「コミスクなのか」、「社会に開かれた教育課程なのか」などの理解を深めていくが必要です。なぜコミスクである必要があるのか、なぜ社会に開かれた教育課程が重要なのかを考える時、子どもたちが生きる未来をイメージし、対話していくことが必要です。

【コミスクの推進について】

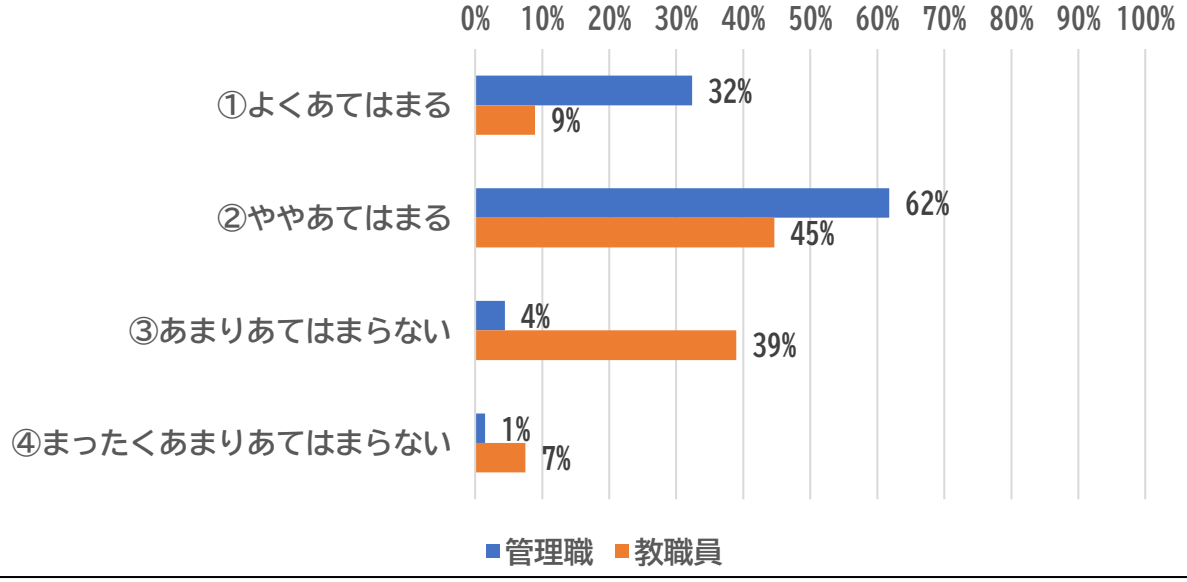
Q9. あなたの学校の保護者や地域住民は、コミスクについて関心がある。



管理職の半数以上が保護者や地域住民のコミスクへの関心が低いと認識していると推測されます。保護者や地域住民へのコミスクの理解を深め、関心を高めるためには、積極的な情報発信や対話の機会の提供が重要です。管理職の方々がリーダーシップを発揮し、コミスクの取り組みや成果を地域全体に広く知らせ、対話をすすめながらコミスクの理念や価値を広めることが求められます。

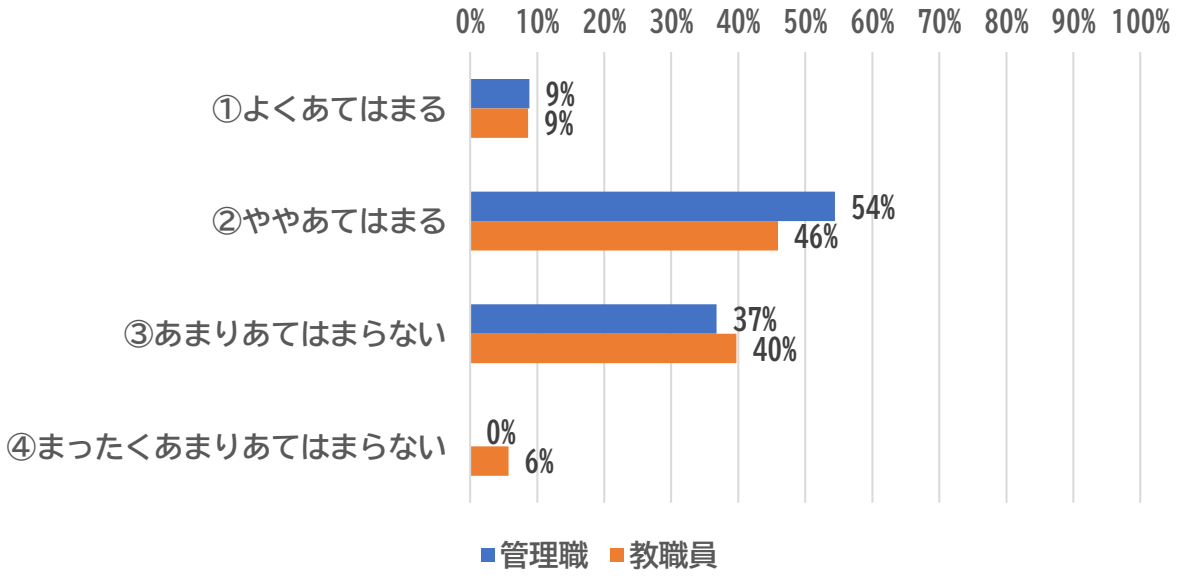
【コミスクの推進について】

Q10. あなた自身のコミスクの理解は深まっている。



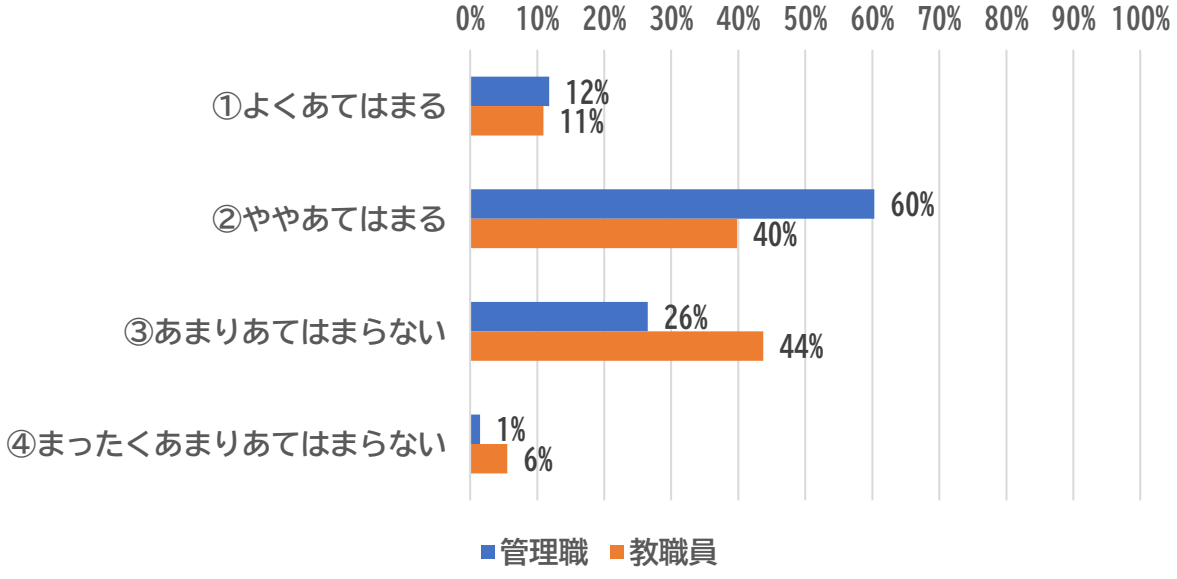
管理職と教職員の意識の差が激しい結果から、コミスクに対する理解を深めるための働きかけが十分でないことがわかります。委員会は、全市的なフォーラムや研修に加え、各学校ごとの「コミスク研修」などの伴走支援を強化する必要があります。また、保護者や地域住民のコミスクへの理解が十分でないことも課題です。情報発信や対話の機会を増やすことなど、具体的な支援や提案を行い、コミスクの理解を深める取り組みを推進する必要があります。

【コミスクの推進について】
Q11. あなたの学校の教職員のコミスクの理解は深まっている。



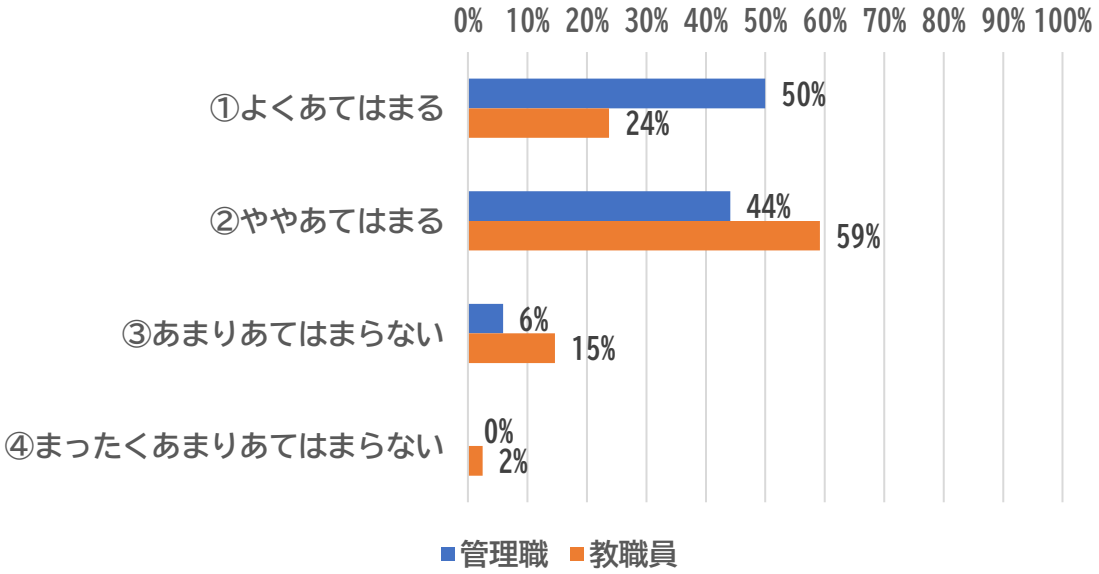
この結果からも、コミスクの理解がまだ十分でないことが見えてきます。次期の学習指導要領の方向性も探りながら、未来志向の学びとコミスクをリンクさせ、理解を深めていく必要があります。また、情報発信や対話の機会を増やし、保護者や地域の皆様にもコミスクの目的や成果を具体的に伝えることも重要です。

【コミスクの推進について】
Q12. あなたの学校では、コミスクの具体的な取組がすすんでいる。



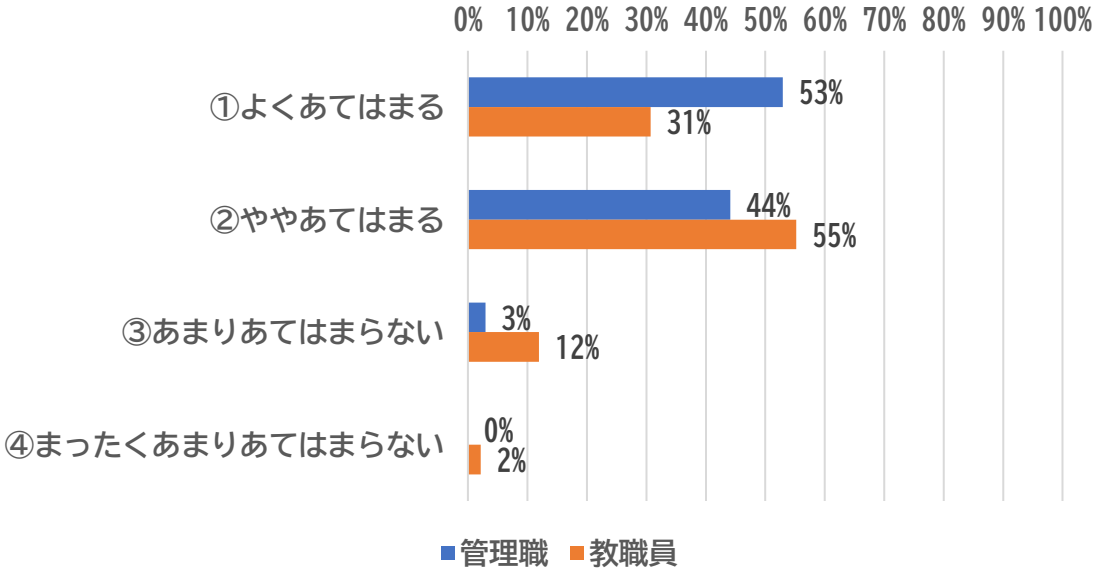
コミュニティスクールの取り組みが「なんちゃってコミスク」化している可能性があります。学習指導要領の理念等の理解不足がここでも考えられます。次期学習指導要領の検討が始まっている中、授業づくりに焦点を当てた校内研究から、学習指導要領の理念に焦点を当てた子どもたちの学びのあり方等、子どもが育つ仕組みづくりに軸足を置いていた取り組みが必要です。

【コミスクの推進について】
Q13.「生きる力」を育むうえでコミスクの果たす役割は大きい。



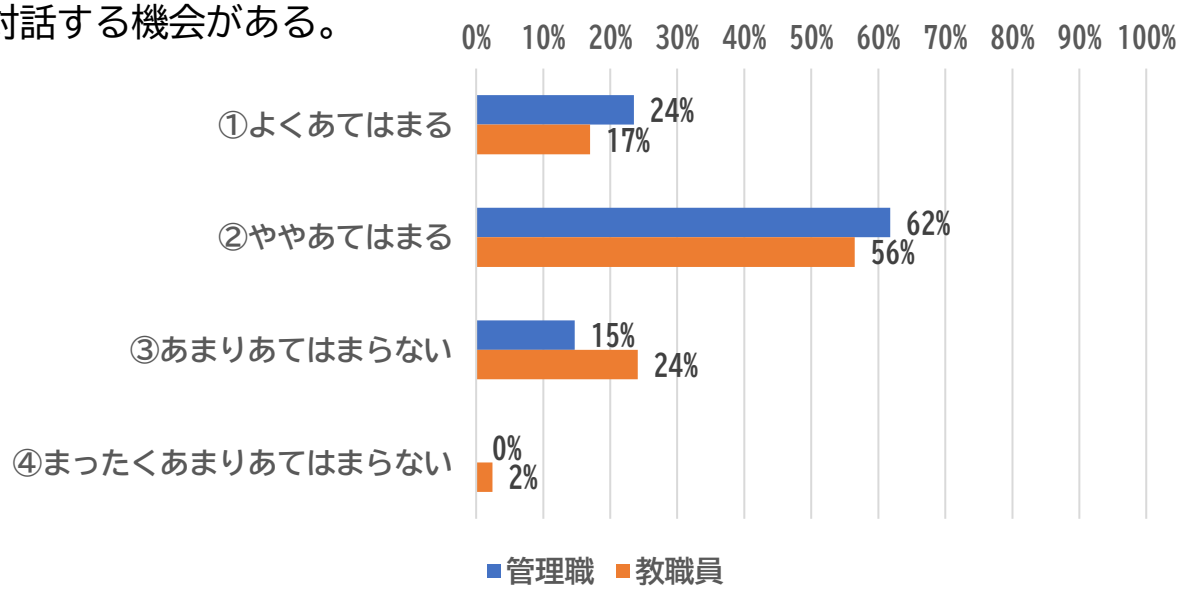
コミスクが「生きる力」を育む上で役割を果たすと感じている一方で、管理職と教職員との意識には差があります。コミスクを子どもたちの学びとのつながりを十分に捉えられていないことがわかります。コミスクは、未来志向の学びのあり方に関連づけて考える視点が必要です。個々が未来志向の教育観へバージョンアップし、コミスクの役割や目的を考える必要があります。

【コミスクの推進について】
Q14. コミスクは“未来を担う子どもたちを育てるため”に必要である。



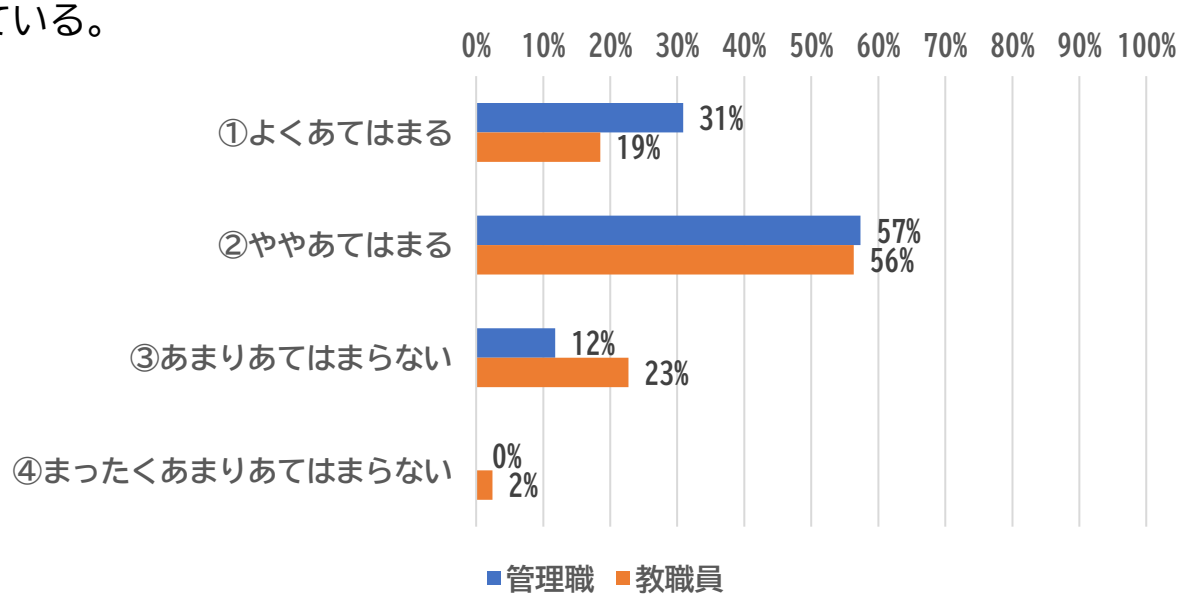
一定数の人がコミスクが未来を担う子どもたちを育てるために必要であると感じていますが、コミスクと子どもの育ちをつなげて捉え切れていないことがここでも見えてきます。コミスクが子どもたちの学びに深く関わり、単元やカリキュラムづくりとのかかわりを、校内研究や研修を通じて子どもたちを主体にした未来志向の学びの考え方につなげることで、未来志向の教育観へバージョンアップしていく必要があります。

【保護者・地域との連携・協働等について】
Q15. あなたの学校では、子どものことや地域の課題等について、学校・家庭・地域等で対話する機会がある。



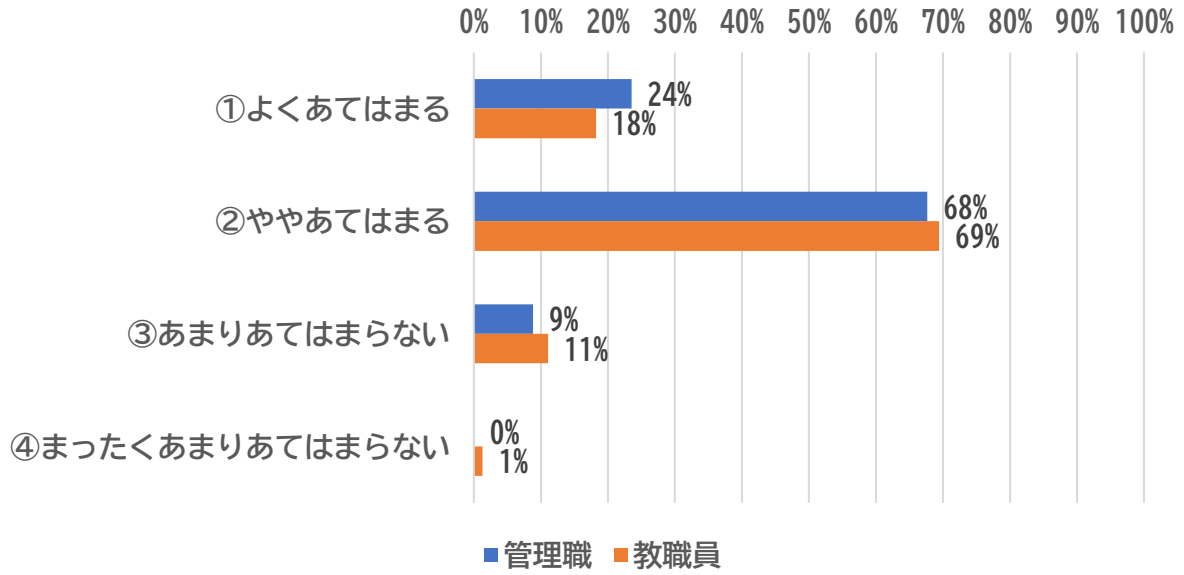
この結果と保護者・地域住民アンケートのQ6の回答結果は正反対の結果となっています。学校側と保護者・地域住民との意識の違いは、Q3やQ4のコミスクの理解や説明に対する保護者・地域住民の回答とも関連しており、学校側が社会に開いていると思っていても、保護者や地域はそう感じていないことがわかります。改めて「社会に開く」という意味やその重要性を考える必要があります。

【保護者・地域との連携・協働等について】
Q16. あなたの学校の校区では、「地域全体で子どもを育てていく」という意識が高まっている。



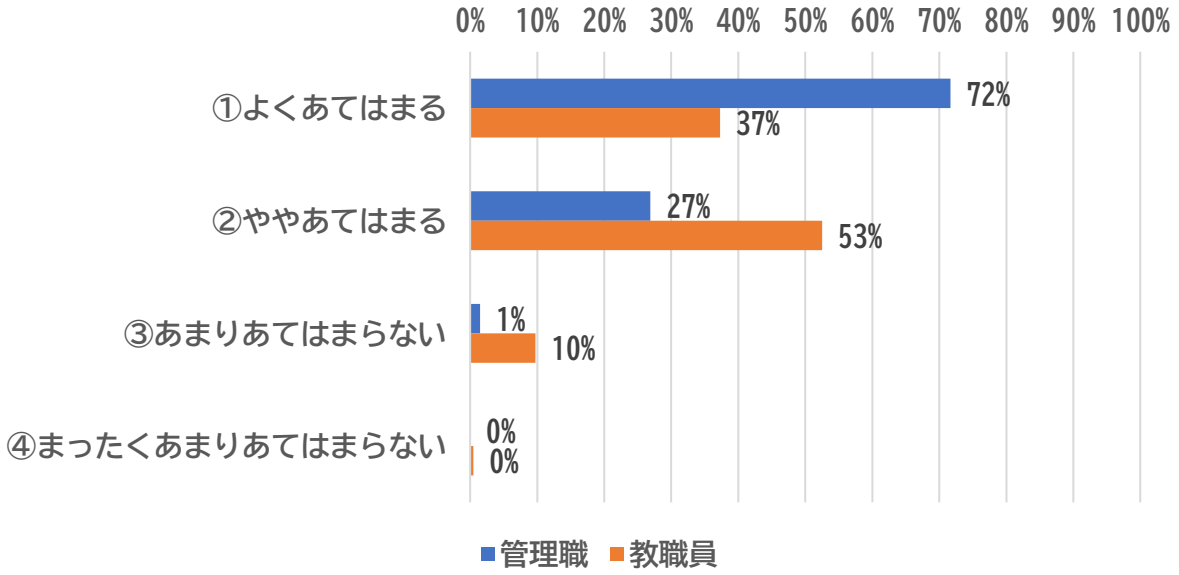
この結果も保護者・地域住民アンケートとの違いが見受けられます。保護者・地域住民アンケートのQ5では半数近くが「地域全体で子どもを育てていくことが大切である」と積極的に肯定的な回答を示しています。このような結果から、地域の中で子どもを育てるために取り組まれている子ども食堂やブックスポット、こども夢文庫、放課後子ども教室など、地域の中で動いている子どもを育てる仕組みを知る必要があります。また、行政側も部局を超え、ゴールを共有し、地域を支える連携に目を向けていく必要がです。

【保護者・地域との連携・協働等について】
Q17. あなたの学校では、保護者や地域の願いや声が、学校運営に反映されている。



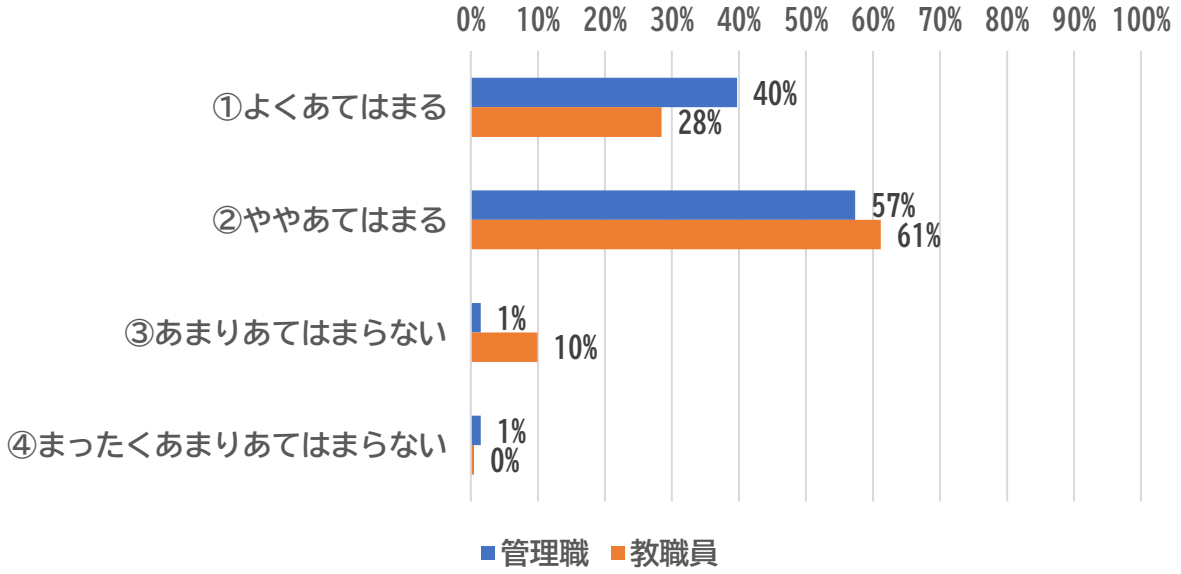
「保護者や地域の願いや声が学校運営に反映されている」と考えている人が一定数存在していますが、まだ不十分と捉えている人が多数であると考えられます。これは保護者・地域アンケートのQ15の対話の機会と関連しており、保護者・地域住民との意識に差があります。対話の機会を十分に設け、学校が目指すものと地域や保護者の願いや思いを相互に共有する対話を深めていくことが必要です。

【保護者・地域との連携・協働等について】
Q18. あなたの学校は、地域に支えられている。



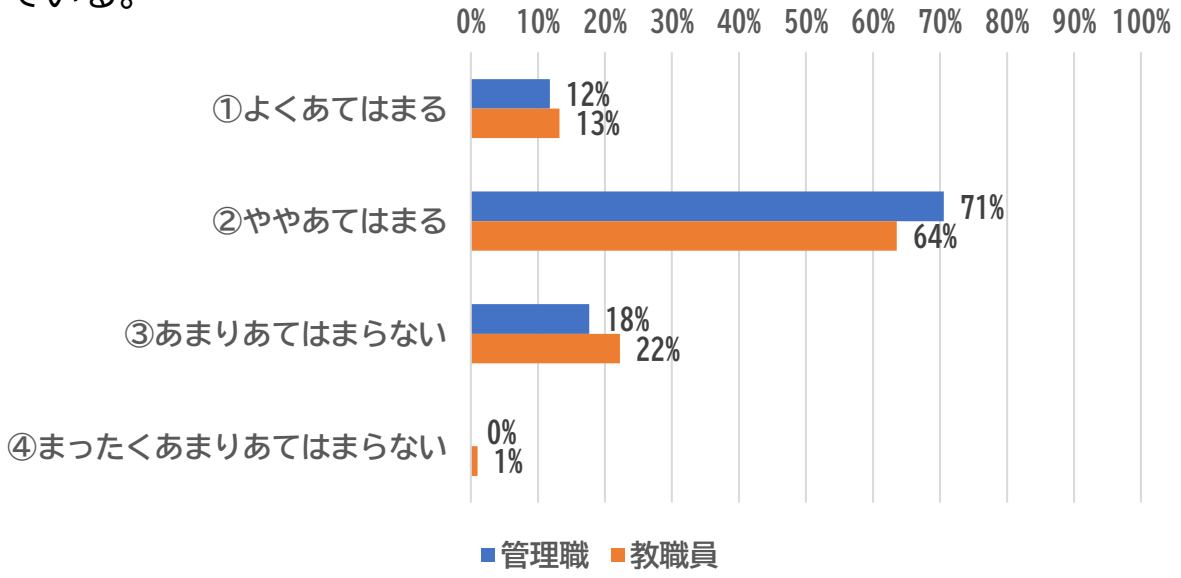
管理職は地域に支えられていると積極的に回答し、地域のサポートが学校運営に大きく貢献していると認識しています。一方、教職員の中には地域に支えられていると感じているなど、地域の支援に対する認識が低い傾向が見られます。教職員には管理職と比べて地域の方と直接コミュニケーションをとる機会が少なく、地域を知る機会も少ないことが背景にあると推測されます。学校のある地域についての知識や対話の機会を設けるなど、コミュニケーションを取れる関係づくりをすすめることが必要です。

【保護者・地域との連携・協働等について】
Q19. あなたの学校は、地域の方が入りやすい雰囲気である。



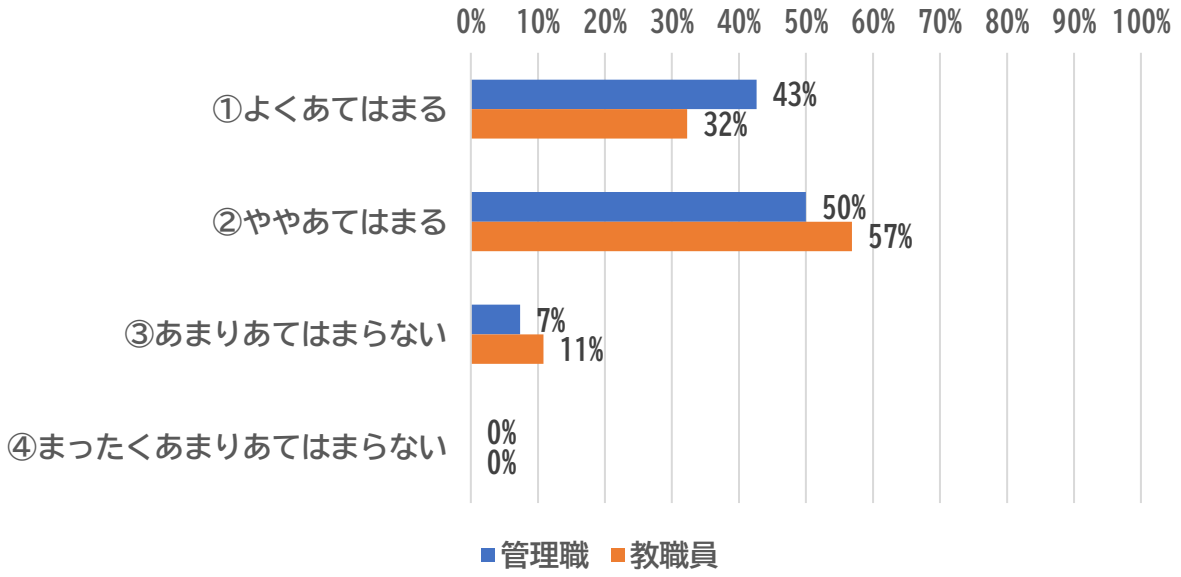
この結果からは、地域の方々が学校に入りにくいという状況があることが推測されます。地域の方々からは学校が敷居が高いとの声も耳にします。安全面への配慮は必要ですが、地域に向けた情報発信を積極的に行うなど、学校に関心を持ってもらうためのアプローチが必要です。また、地域の大人と子どもが一緒に学ぶ機会や、学校に足を運んでもらえる環境を地域の方々と一緒に作り上げることも重要です。

【保護者・地域との連携・協働等について】
Q20, あなたの学校の児童・生徒は、地域や社会で起こっている問題や出来事に関心をもっている。



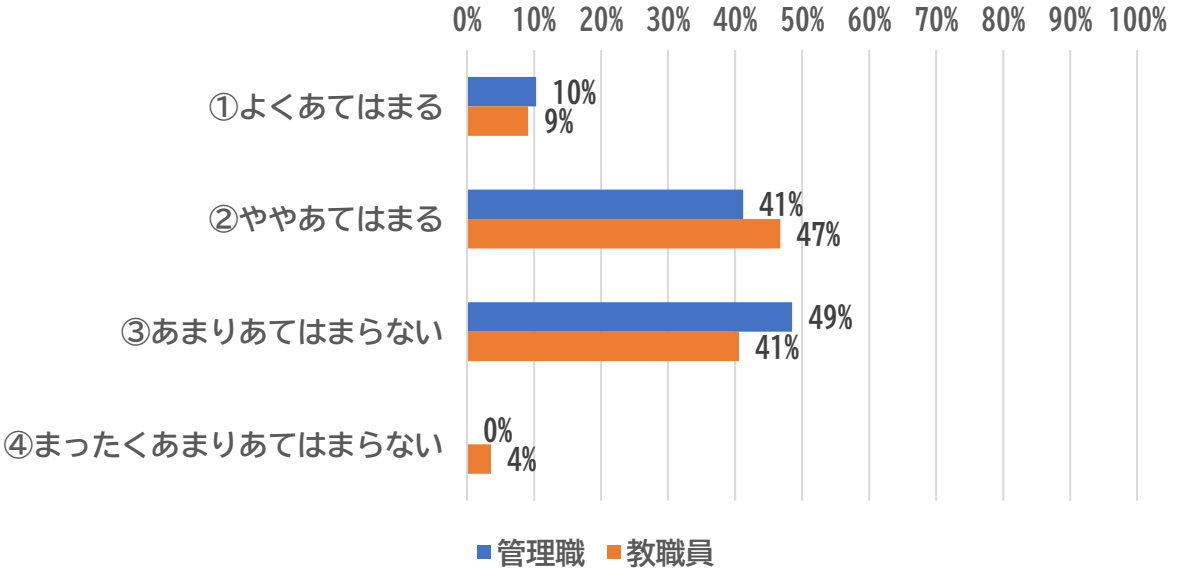
この結果から、管理職と教職員の中で否定的な回答が2割を占め、消極的肯定も多数を占めています。そのため、子どもたちが「地域や社会の問題や出来事に関心をもっている」とは言えない現状があります。未来を担う子どもたちが地域や社会への感度を高めていくためには、教職員自身も地域や社会への関心を持ち、単元の構想やカリキュラムデザインにも地域や社会への関心を反映させることが必要です。

【保護者・地域との連携・協働等について】
Q21. あなたの学校の校区の保護者や地域住民は、ボランティアとして学校活動をサポートしてくれている。



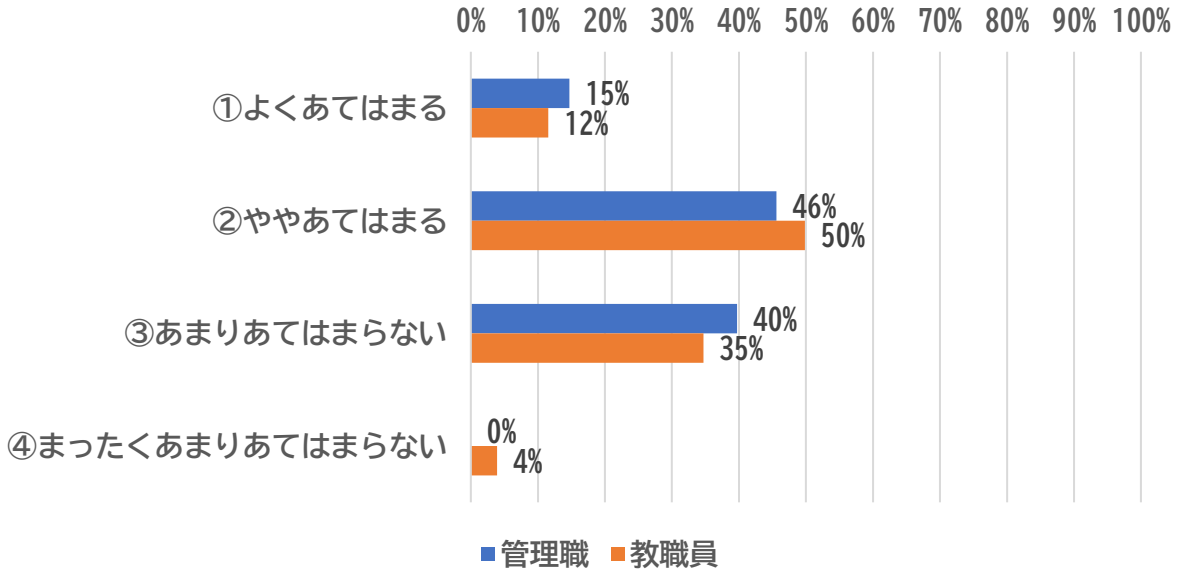
この結果からは、多くの管理職と教職員が保護者や地域住民のサポートが教育活動に貢献していると認識しています。ただし、教職員は管理職に比べてサポートが見えにくい傾向があり、直接的なコミュニケーションの機会も少ないことが背景にあるのではと考えます。地域を教材とした学びづくり等を通して、地域を知り、地域の皆さんとのコミュニケーションをとる機会をつくっていくことが必要です。

【保護者・地域との連携・協働等について】
Q22. あなたの学校の児童・生徒は、地域等でのボランティア活動に参加している。



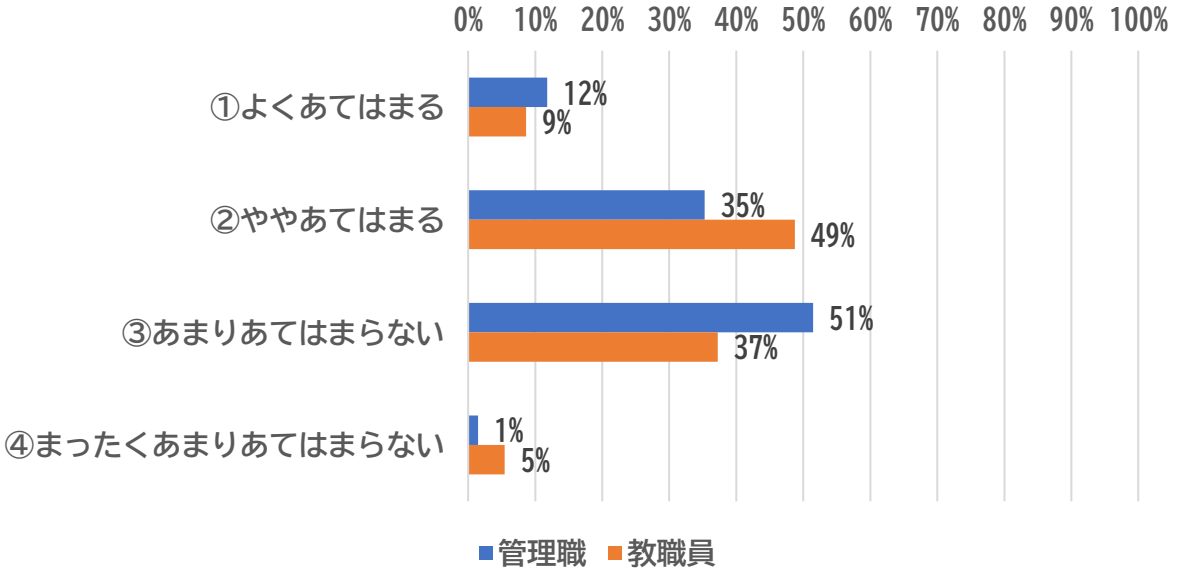
この結果からは、児童・生徒が地域のボランティア活動に積極的に参加しているという認識は高くありません。地域とのつながりや地域への貢献の機会は、子どもたちの成長において重要な要素です。学校、地域、家庭などの連携と協働を通じて、子どもたちが地域で活躍できるような機会をつくることが必要です。

【保護者・地域との連携・協働等について】
Q23. 児童・生徒が、保護者や地域住民等大人と共に学び合う機会を設けている。



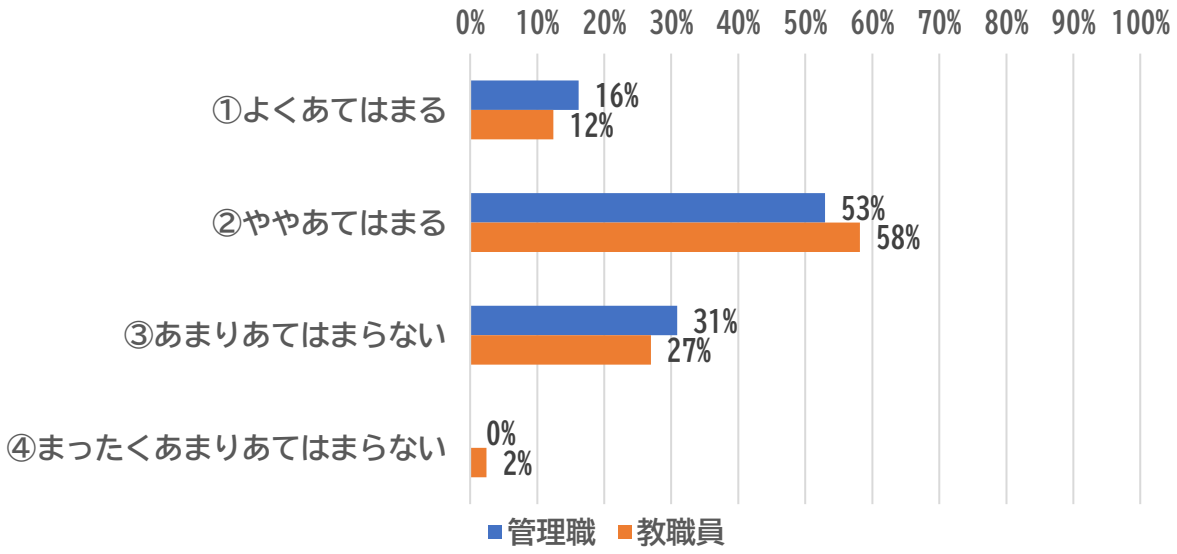
この結果から、児童・生徒が保護者や地域住民と共に学び合う機会が少ないことがわかります。子どもたちは大人の姿から学び、大人も子どもの姿から学ぶといった非認知面の成長という視点が必要です。今後、学びを考える際には、非認知面の成長にも視点を当て、多様な人との交流等非認知面に関わる要素を大切にしながら、子どもも大人も共に成長する環境をつくっていくことが必要です。

【保護者・地域との連携・協働等について】
Q24. あなたの学校では保護者や地域住民が学ぶことができる場を設けている。



この結果から、大人の学ぶ姿が子どもたちに与える影響についても目を向けることが必要です。明石市の小中学校にはコミセンが設置され、中学校のコミセンは地域の生涯学習の拠点としての役割を果たしています。人生100年時代においては、生涯を通じた学びの充実が求められています。子どもたちのための学校から、地域の学びの拠点という学校に対する意識をバージョンアップすることも必要です。子どもも大人も一緒に学べる講座やワークショップの開催など、学びの新たな仕組みづくりへのチャレンジが必要です。

【保護者・地域との連携・協働等について】
Q25. 学校の取組が地域の活性化につながっている。



この結果から、学校での学びが地域や社会とつながっているという意識が低いことがわかります。今一度、学校の学びがよりよい未来の市民を育てるということを意識する必要があります。学校の学びを地域とつなげ、子どもたちの当事者意識を培うために、子どもが地域の方と対話する場や地域の中で子どもたちが活動できるプロジェクトなど、新たな学びづくりが求められています。

【管理職自由記述要約】

1. コミスクの推進

〇理解の深化と熟議の重視

・現在、コミスクの重要性を認識し、教職員とともに理解を深めようとしている。

・学校・家庭・地域が連携し、子どもを地域全体で育てる意識を共有し、コミスクを発展させたいと考えている。

〇カリキュラム・マネジメントの必要性

・カリキュラム・マネジメントの推進が重要であり、教職員にもその必要性を理解させ、地域や保護者との対話を進めていきたい。

〇地域との協働

・地域との連携を深めるために、ゲストティーチャーや相互参画を取り入れ、地域と学校の両者にとってプラスとなる活動を模索している。

〇持続的な取り組みの必要性

・短期間でコミスクを推進するのではなく、小さな活動から始めて、徐々に意義を広めることが重要だと考えている。

2. 地域との協働・連携

〇地域との強い結びつき

・学校が地域から大きな支援を受けており、その協力関係を大切にして、今後も地域と共に子どもを育てていきたいという声が多い。

〇学校が地域のハブになる役割

・学校が家庭や地域をつなぐハブとしての役割を果たし、地域全体で子どもの成長を支える場を提供することが大切だと感じている。

3. 教職員の意識改革と課題

〇閉鎖的な意識の変革

・教職員の中にはまだ地域との連携に対する閉鎖的な意識があるため、これを変革し、よりオープンな姿勢でコミスクを進める必要がある。

〇保護者や地域との対話の重要性

・コミスクを進めるためには、学校が中心となって保護者や地域と対話し、協働して活動する機会を設けることが重要である。

4. 長期的なビジョン

〇未来を見据えた取り組み

・10年後、20年後を見据え、コミスクは非常に重要な仕組みであり、持続的な成長を支えるために必要な取り組みであると感じている。

〇特色ある学校づくり

・学校が地域と協働し、それぞれの学校の特色や課題に応じた取組みを進めることで、子どもの成長を支えることができると考えている。

５．その他の意見

〇学校の核としての役割

・学校は誰もが通過する場所であり、その経験を活かして地域全体で子どもの未来を考えることができる場であるという意見が見られる。

〇子どもの自立した成長

・地域との協働によって、子どもたちが自立して成長する姿を目の当たりにし、学校教育が地域と連携する意義を強く感じている。

管理職の自由記述からは、コミスクの推進や地域との連携、教職員の意識改革、そして長期的な教育ビジョンに焦点が当てられていることがわかります。地域との協働を重視しながらも、教職員や地域住民の負担に配慮し、慎重に進める姿勢が見受けられます。明石市はコミュニティづくりの歴史があり、中学校コミセンや小学校コミセンなどが設置され、地域からの学校支援も積極的ですが、コミスクが動いているように見える「なんちゃってコミスク」から一歩進める必要があります。

未来に向けて、子どもも大人も共に成長する仕組みとしてコミスクを捉え、学校を地域全体と結びつけるハブとして位置付け、長期的な視点で地域と共に歩む学校づくりを目指すために、学校・地域・家庭の対話を進め、ステップを踏みながら持続可能な仕組みづくりを進めることが必要です。

【教職員自由記述要約】

1. 地域との連携に対する肯定的意見

・地域の方々のおかげで、児童が地域住民を身近に感じている。
・地域と関わることで、子どもたちに地元愛が育まれ、将来的に地域へ戻るきっかけになる可能性がある。
・地域との交流は、子どもたちの学習に役立ち、今後も継続して協力していきたい。

2. 負担増加への懸念

・コミスクが教職員にとって負担が増えるという不安が強い。
・現在の業務が多忙なため、地域連携に十分な時間を割くのが難しい。
・コミスクの導入が働き方改革に逆行していると感じる。
・人的補償がないため、教職員が中心的な役割を担うと業務過多になる。

3. 学校運営や管理職への意見

・学校運営協議会が形式的かつ閉鎖的で、機能していない。
・管理職が積極的にコミスクを推進していないため、教職員の間で取り組みが進まない。
・学校運営協議会や地域学校協働活動の違いが教職員に十分説明されておらず、認識が統一されていない。

4. 地域との関係の希薄さ

・都会的な地域では住民同士の関わりが薄く、地域とのつながりを強化するためには大きな変革が必要。
・地域住民の間で希薄な関係性があり、保護者や地域の協力が得られない場合、学校側に負担が集中する。

5. ビジョンの不明確さに対する意見

・コミスクの具体的な進め方が不明確で、理念は良いが実行方法がはっきりしない。
・「あれもこれも」と多くの取り組みが教職員の負担になっており、現場での実行が困難。
・研修の機会や、他校の成功事例の共有が不足しているため、学校ごとに取り組み方や進度が異なる。

6. 地域との連携を深める必要性

・子どもたちの豊かな成長にとって、地域全体で支えることが重要だと認識している。
・地域・保護者にもメリットがあるような取り組みを模索し、一緒に地域社会を支える仕組みが必要。
・コミスクを進めることで、地域全体が連携して子どもたちを育てる環境を整備したい。

7. 学校環境とリソース不足

・児童数が増加し、教室等が不足している現状があるなど、教育活動のスペースが不足していると感じている。
・大規模校では保護者のまとまりが薄く、地域との関わりが難しい。

8. 教育的意義と将来の期待

・子どもたちが多様な大人と出会う機会を増やすことで、社会的経験を積んでほしい。
・コミスクが子どもの成長にプラスとなり、豊かな人生につながる可能性があるため、地域連携を続けるべきだと考える。

9. その他の問題点

・保護者や地域住民の理解が進まず、説明から始めなければならない場面が多い。
・コミスクの実施が地域や保護者の関心を引けず、学校側に負担が集中している。

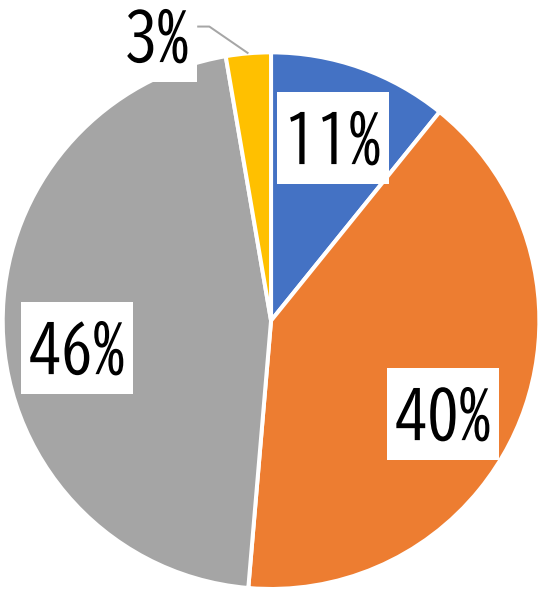
教職員の意識には、コミスクの理念への賛同や期待がありますが、同時に現実的な負担の増加や具体的なビジョンの不明確さ、支援体制の不十分さへの懸念が強いです。
そうした面で、再度「今、なぜ、コミスクなのか」を考え直す必要があります。特に、コミスクを「未来社会を生き、未来を担う人を育てる仕組み」として捉える視点を学校・地域・家庭で共有することが重要です。
「コミスクは何をすればいいか？」や「コミスクに入ると何かさせられる」といった視点ではなく、現状を見つめながら対話を通じて自らで未来を創造する当事者意識を持ち、社会の変化に柔軟に対応できる人材を育てる仕組みを目指す必要があります。そのためには、想像力を働かせ、創造的な対話の文化を広め、根付かせることが欠かせません。

【指導主事】

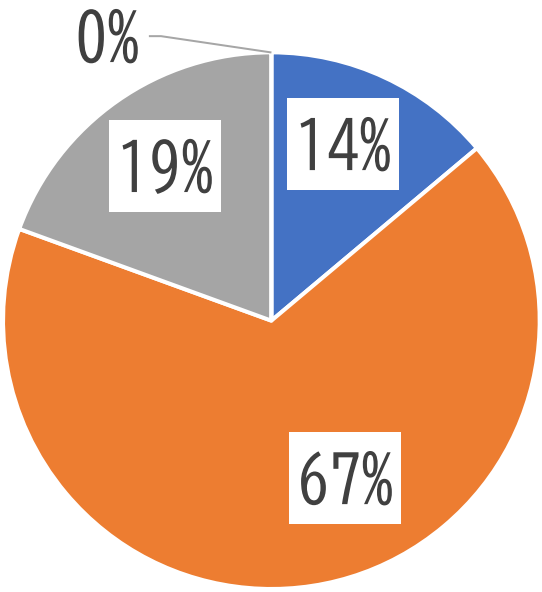
回答率　指導主事：100%

【コミスクの推進について】

Q1. 指導主事間でコミスクについてよく話をする。



Q2. あなた自身のコミスクの理解は深まっている。

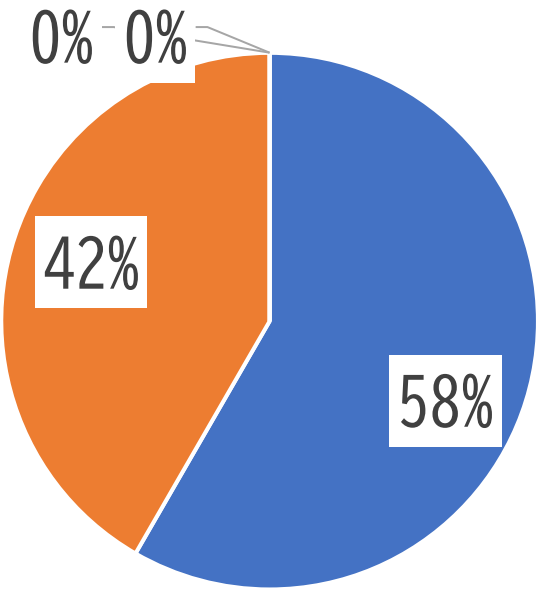


よくあてはまる　あまりあてはまらない

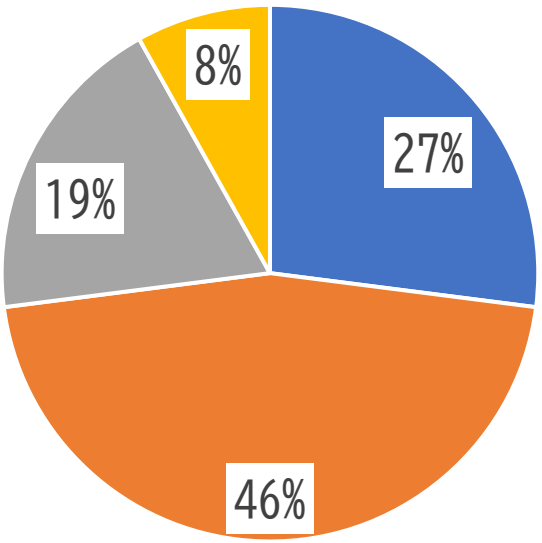
ややあてはまる　まったくあてはまらない

【コミスクの推進について】

Q3. これからはコミュニティ・マネジメントという視点も必要である。



Q4. 自分の担当とコミスクはつながりがある。

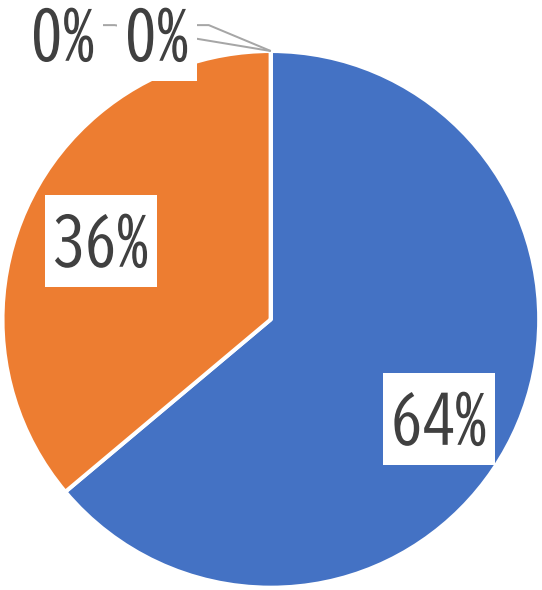


よくあてはまる　あまりあてはまらない

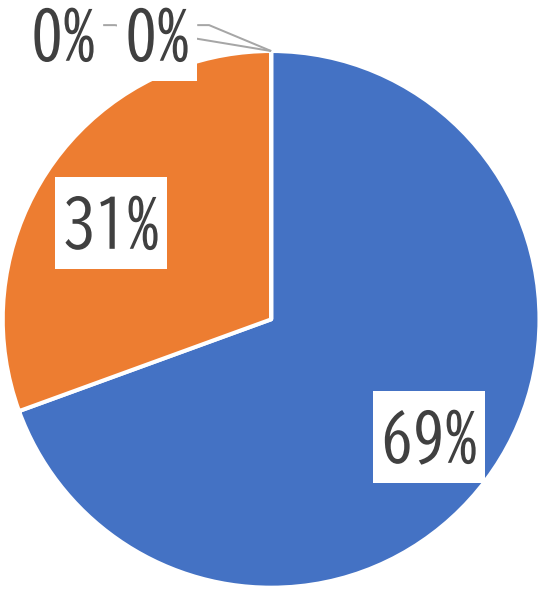
ややあてはまる　まったくあてはまらない

【コミスクの推進について】

Q5.「生きる力」を育むうえでコミスクの果たす役割は大きい。



Q6.コミスクは“未来を担う子どもたちを育てる”ために必要である。



よくあてはまる　あまりあてはまらない

ややあてはまる　まったくあてはまらない

「生きる力の育成」と「子どもたちの未来・社会の未来」がベースにコミスクについての理解を深めていく必要があります。コミスクは、人の成長という視点から理解を深め、人々をつなぎ、未来の社会に向け、コミュニティ・マネジメントの視点も今後必要となってきます。こうした未来志向の視野で考えることが、より良いビジョンを持つことにつながります。未来志向のビジョンを持つためには社会の流れ等、情報共有を進め、指導主事間での対話をおこないながら日々意識を更新していく必要があります。

【指導主事自由記述要約】

1．コミスクの重要性

・共通理解の深化

コミスクの必要性は全ての学校で考えるべきであり、指導主事もその意義について共通理解を深めることが求められている。

・地域との関わり

指導主事自身も地域とのつながりが薄れていると感じており、コミスクが子どもたちにとって重要な役割を果たすと認識している。

・開かれた学校の推進

一部の学校ではコミスクの理解と推進が進んでいるが、地域と学校が一体となって子どもたちの成長を支えるためには、さらに開かれた学校作りが必要だという課題がある。

２．学校と地域の協力

・地域との協働

学校、保護者、地域が連携して子どもたちを育てる姿勢が重要であり、学校運営協議会などに教職員も積極的に参加すべきだという意見がある。

・カリキュラムマネジメント

地域や家庭との関わりを重視した教科横断的なカリキュラムマネジメントが今後の重要な課題である。

３．指導主事の役割

・現場での改善

指導主事がコミスクに関与しながら改善点を見出し、特にウェルビーイングの考え方を広めていく必要がある。

・多様な課題への対応

子どもたちを取り巻く多種多様な課題に対して、学校単独では限界があり、地域との連携が不可欠だとの認識が共有されている。

４．コミスクの意義と課題

・教育課題の解決

コミスクの仕組みは、学力向上、非認知能力の育成、不登校対策、PTA問題など、現代の教育課題を解決するための重要な方策であると捉えられている。

・対話の広がり

コミスクの活用方法について対話を進め、熟議を通じて解決策を模索することが必要だと考えている。

５．AI時代と協働力

・協働の重要性

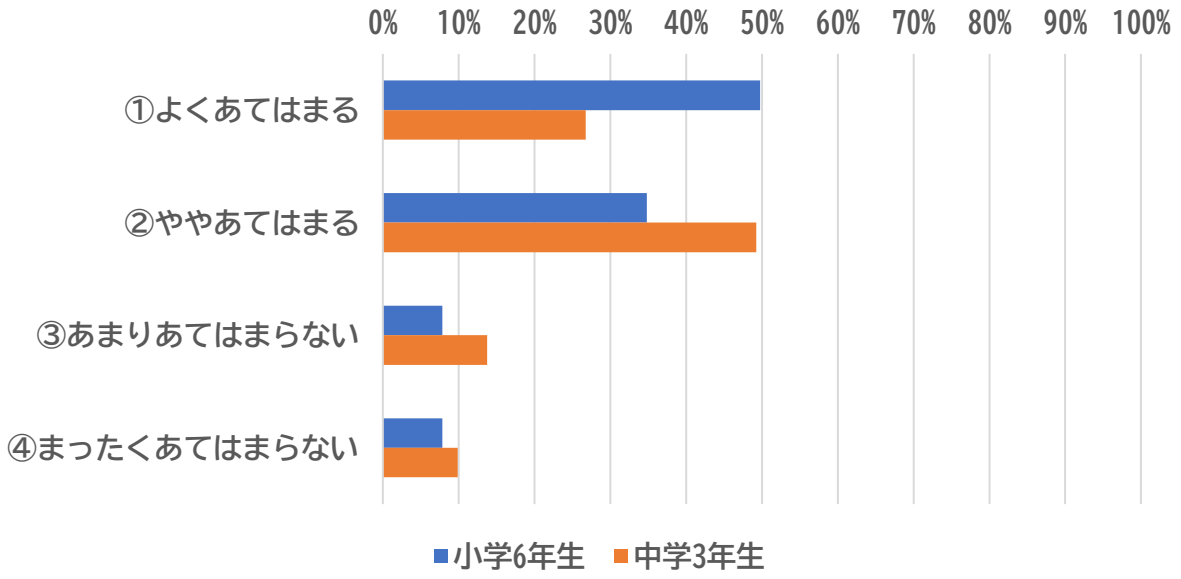
AI時代においても、人との関わりや協働する力が極めて重要であり、そうした視点でカリキュラムをデザインしていくべきだと考えられている。

指導主事は、コミスクは、今後の教育の中核となる重要な要素であり、学校、地域、家庭が協力して子どもたちの成長を支えていくことが大切であると認識していることがわかります。しかし、まだ「生きる力」の実現にむけたコミスクの理念や考え方についての理解が不十分なところがあります。このことが、コミスクは地域との連携を通じて子どもたちの成長を支える重要な要素であると認識しているものの、コミスクが、子どもたちの成長を支える自分自身の担当業務とのつながりに目を向ける段階まで至っていないことにつながっています。
コミスクの仕組みが学力向上や非認知能力の育成、不登校対策など幅広い教育課題に対して効果を発揮し、子どもの成長を支えるためには、世代や立場、また、係や課といった組織を超えた対話から生まれる連携・協働が必要です。幅広い、柔軟な対話の仕組みを作り上げていくことが効果的な伴走支援につながっていくと考えています。

【児童・生徒】

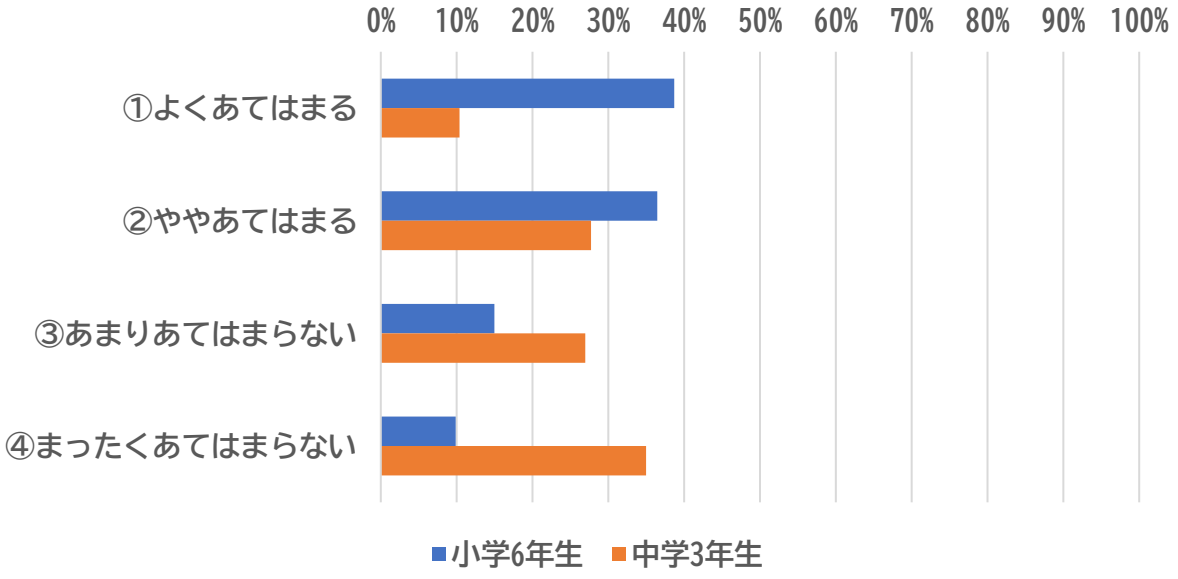
回答率　小学校：59%　　中学校：71%

Q1. あなたの学校は、コミスクである。



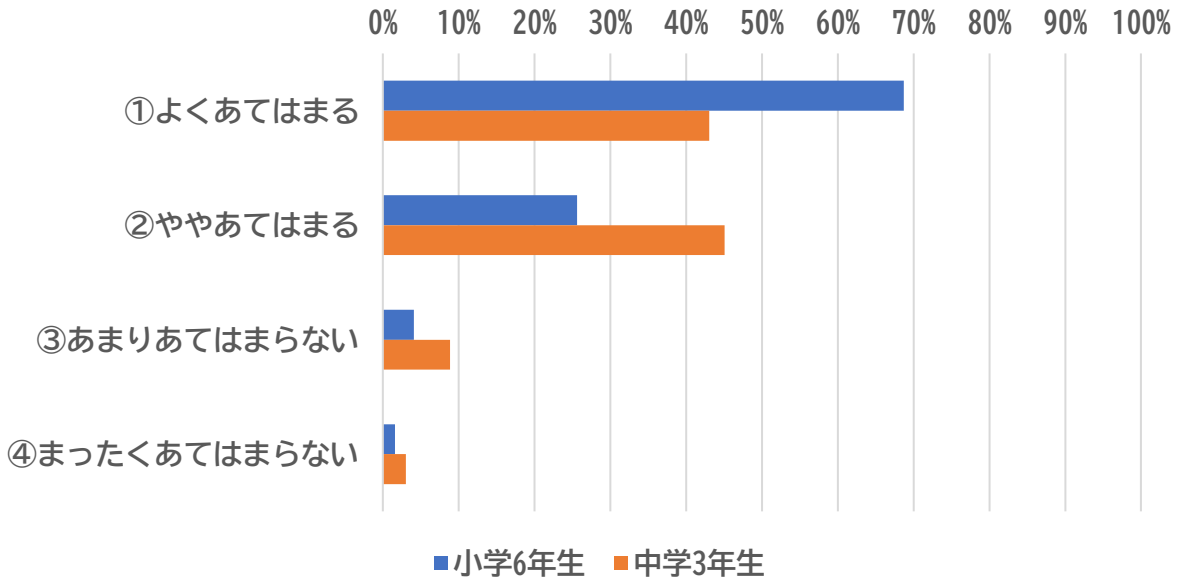
小学生の方が中学生に比べ、自校がコミュニティ・スクールだと自覚している割合は高いです。小学生がコミュニティ・スクールの仕組みを理解しているというよりも、地域の人との交流する機会が中学生に比べて多いことが関係しているのではないかと思われます。

Q2. これまでに地域の人を先生としてまねいた授業を受けたことがある。



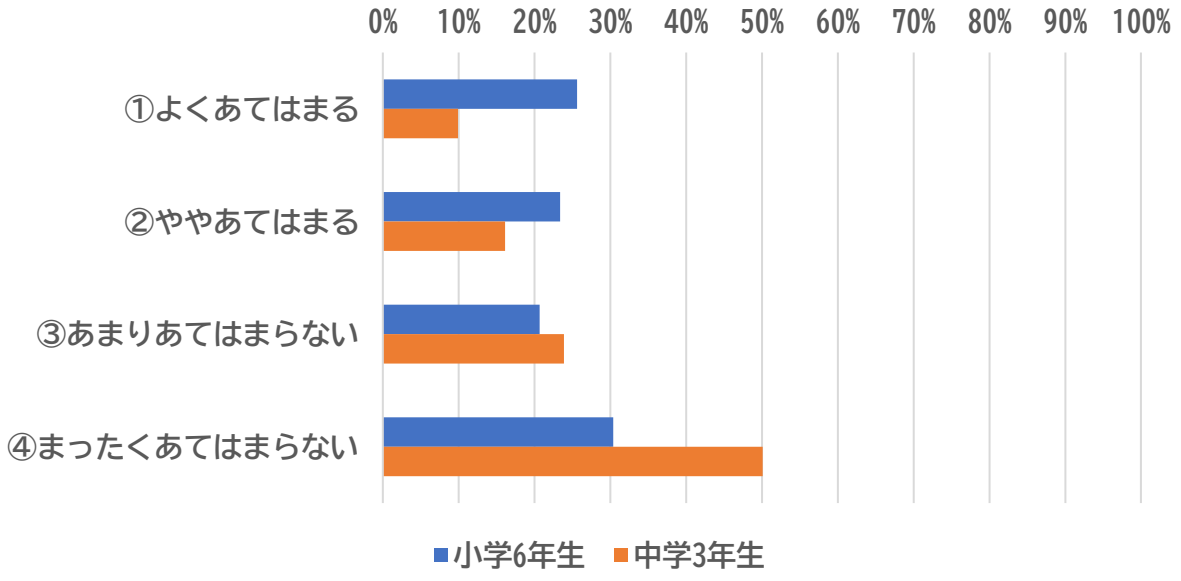
小学校は、地域の人をゲストティーチャー等としてまねいた授業が多いことが推測できます。中学校でも、地域の人をまねいて交流や、学ぶ機会をいかにつくっていくかが今後の大きな課題です。

Q3. 地域の人たちは自分たちを支えてくれていると思う。



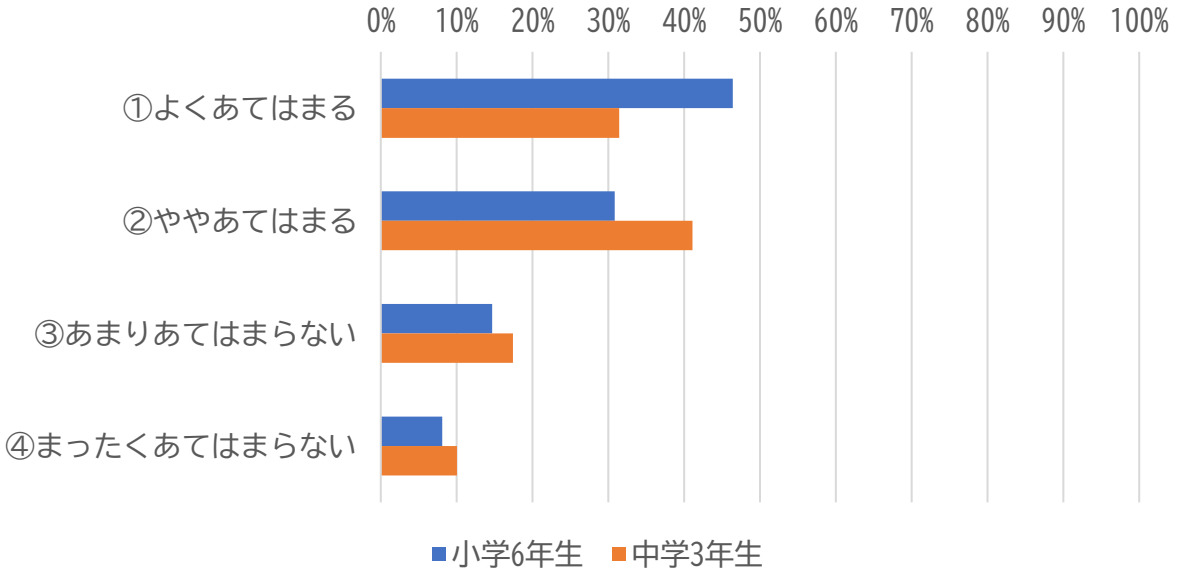
小学生は、地域とのつながりやサポートを強く感じていることがわかります。す。しかし、中学生になると、成長に伴い、地域から自分たちがサポートよりも、友だち同士の関係に目が向いていくようになっていると推測します。年齢があがっても、自分たちの地域とのつながりを実感できる機会等を設けていく必要があると考えます。

Q4. これまでに地域やコミセンでおこなわれている学習会や教室等に参加したことがある。



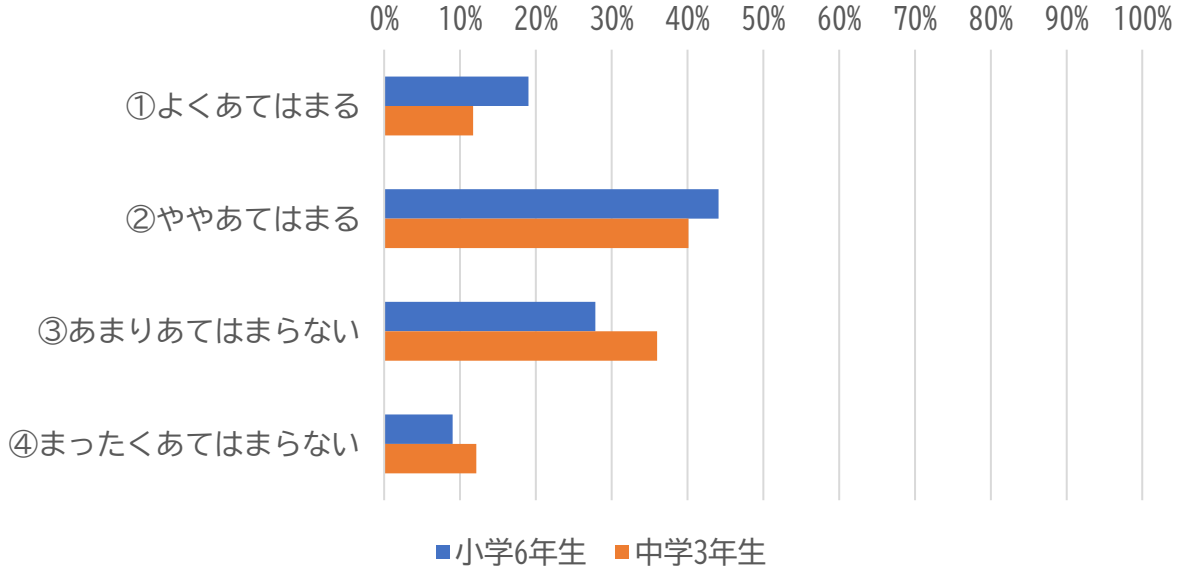
小学校では一定数の子どもが、小学校コミセン等を中心に“夢文庫”“放課後子ども教室”“子ども食堂”等地域で開かれている子どもサポートに参加していることが見えてきます。中学校でも数英応援団等卒業生や地域人材に参画してもらうなど、地域での学びの場として位置づけていくことが必要であると考えます。

Q5. これまでに今住んでいる地域の行事に参加したことがある。



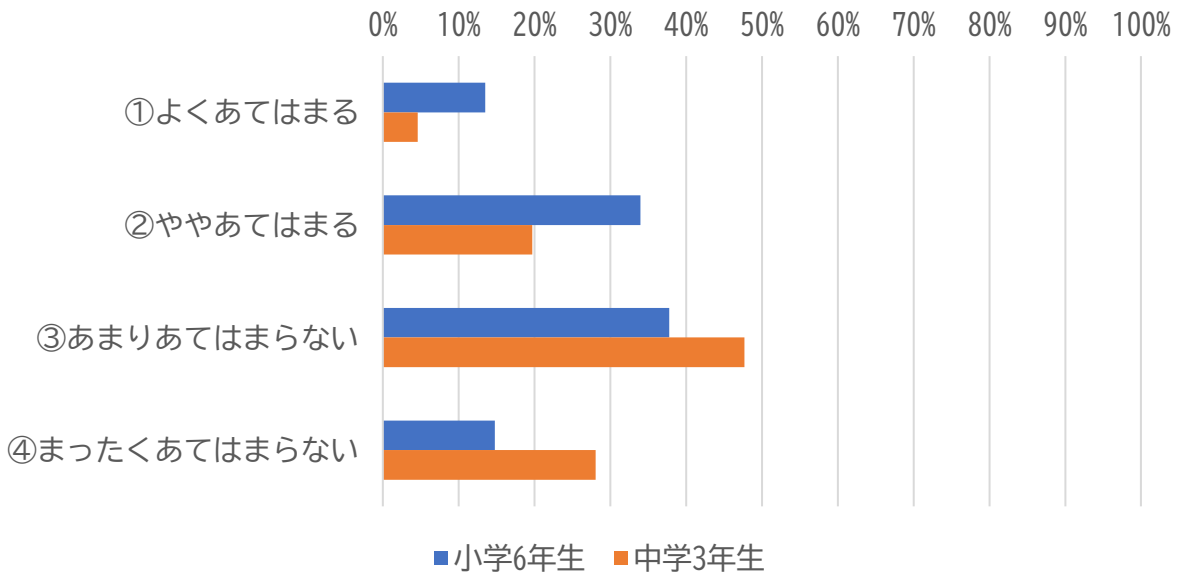
年齢が上がるにつれ、地域の行事への参加が低下しています。中学生になると、部活動や個人での活動範囲も広がり、地域の行事に対する関心や興味が低くなってくると推測されます。地域とつながった学びや地域貢献といった視点など、子どもたちの地域への関心をつないでいくことが大切だと考えます。

Q6. 地域や社会で起こっている問題や出来事に関心がある。



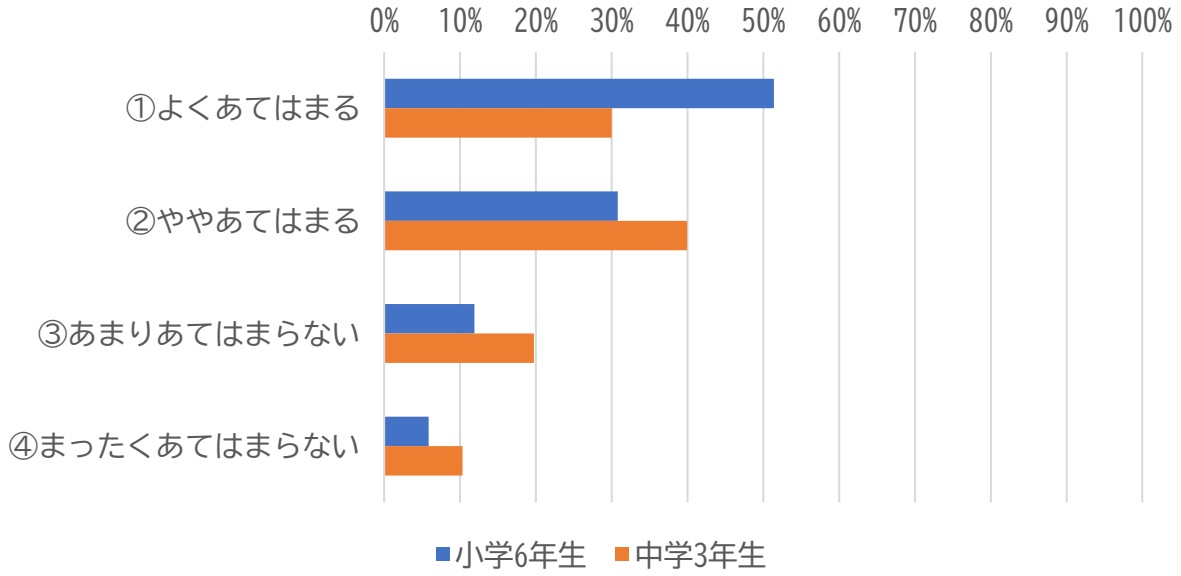
小学生、中学生ともに、消極的肯定と消極的否定の割合が高いことが分かります。関心の程度には発達段階や個人差がありますが、より多くの児童・生徒が地域や社会の問題に関心を持ち、子どもたち自身の社会を創る当事者としての意識を高めていくことが必要です。そのためには、地域をベースにした単元開発やカリキュラムデザイン等地域とつながった学びをすることで、子どもたちに社会を見つめる目を培っていく必要があると考えます。

Q7. 地域の人と一緒に活動する機会が増えた。



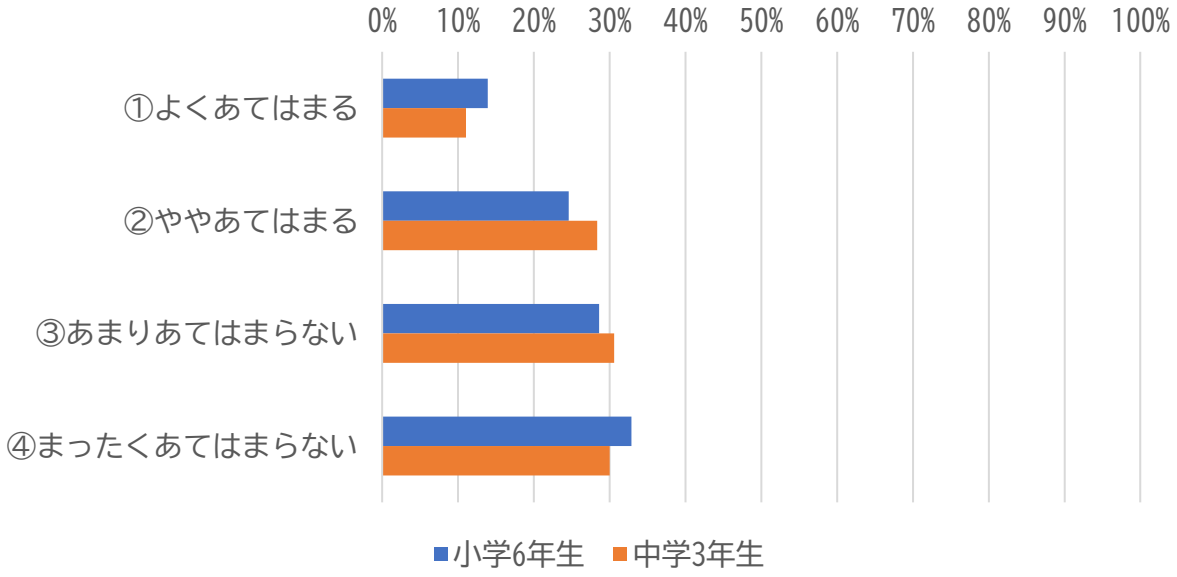
全体的に地域の人との活動の機会が増えていると感じる割合が低いことが見えてきます。地域の中での活動や行事だけでなく、学校での学びにも地域の方に積極的に参加してもらう機会を設けるなど、社会とつながる中での学びを単元やカリキュラム等でデザインしていくことが必要だと考えます。

Q8. 自分の住んでいる地域に話ができる大人がいる。



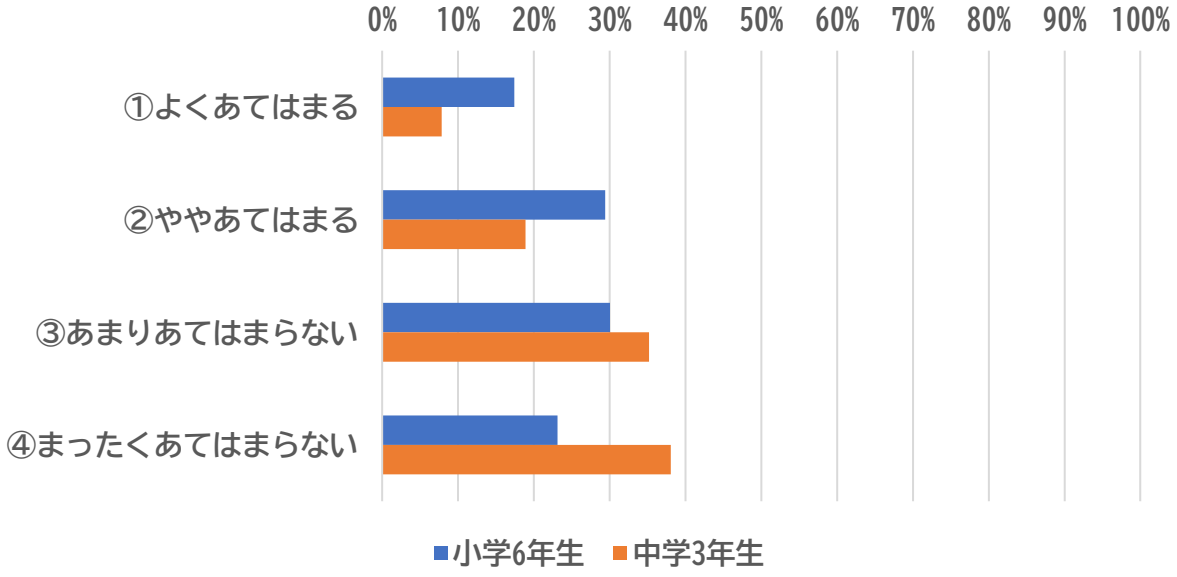
全体的に、地域に話ができる大人がいると感じている割合は高いです。そのベースにはスクールガードさんの存在があると考えます。毎日、子どもと地域の大人との接点となるスクールガードさんの働きと価値を再認識する必要があります。また、地域の中に話ができる大人等がいることの意味や価値を改めて考えていく必要があると考えます。

Q9. 今住んでいる地域でボランティア活動をしたことがある。



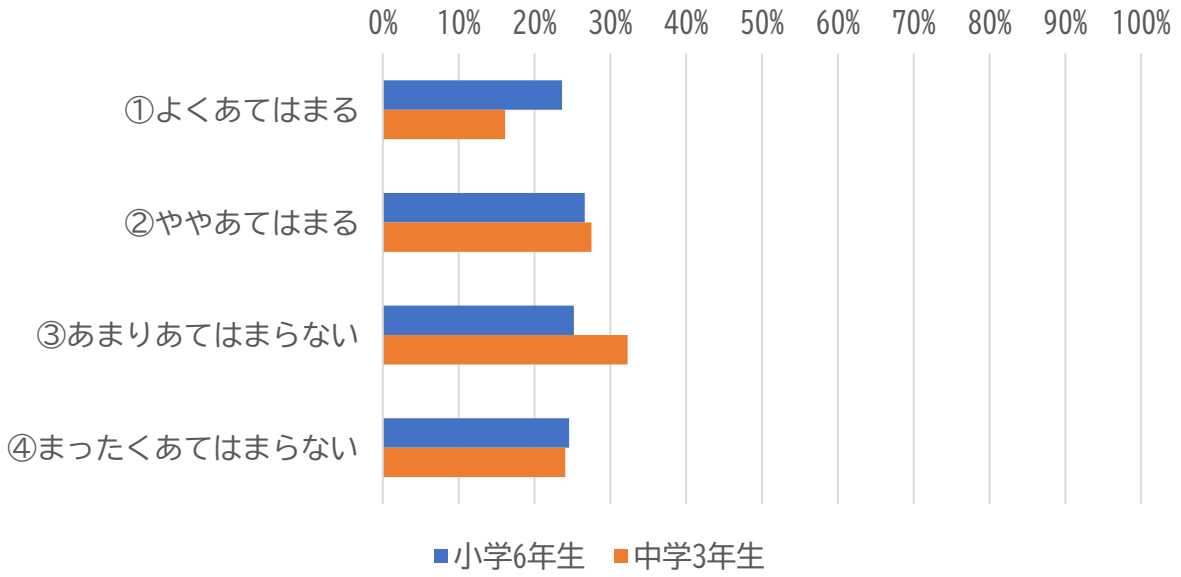
全体的に、今住んでいる地域でのボランティア活動の経験がないと回答した児童・生徒が多いことがわかります。しかし、地域の清掃等保護者の方と一緒に参加した経験がある子も多いのではと推測します。また校区によっては地域行事の中で積極的に子どもたちにボランティアとしての参加を呼び掛けるといった取組も増えてきています。今後、ボランティア活動を含めた子どもたちの社会貢献への意識を高め、地域の中で活躍できる仕組みづくりがすすめていくことが、未来を創る子どもたちが育っていくことにつながると考えます。

Q10. 地域の人が学校に来て学んでいる姿を見たことがある。



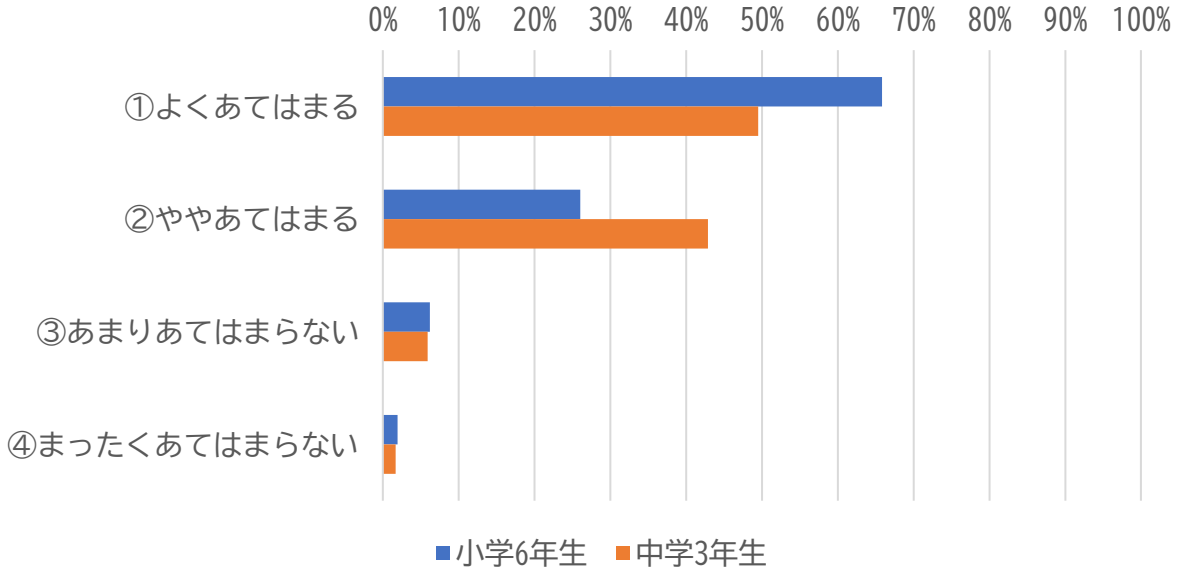
一部の児童・生徒が、「地域の人が学校に来て学んでいる姿を見たことがある」と回答しており、コミセンの活動に参加されている地域の方の姿ではと推測します。そうしたコミセンの活動だけでなく、子どもたちの学びの中にも大人の学びを巻き込んでいく仕組みを考えていく必要だと考えます。

Q11. 身近にこんな大人になりたいと思うようなモデルとなる大人がいる。



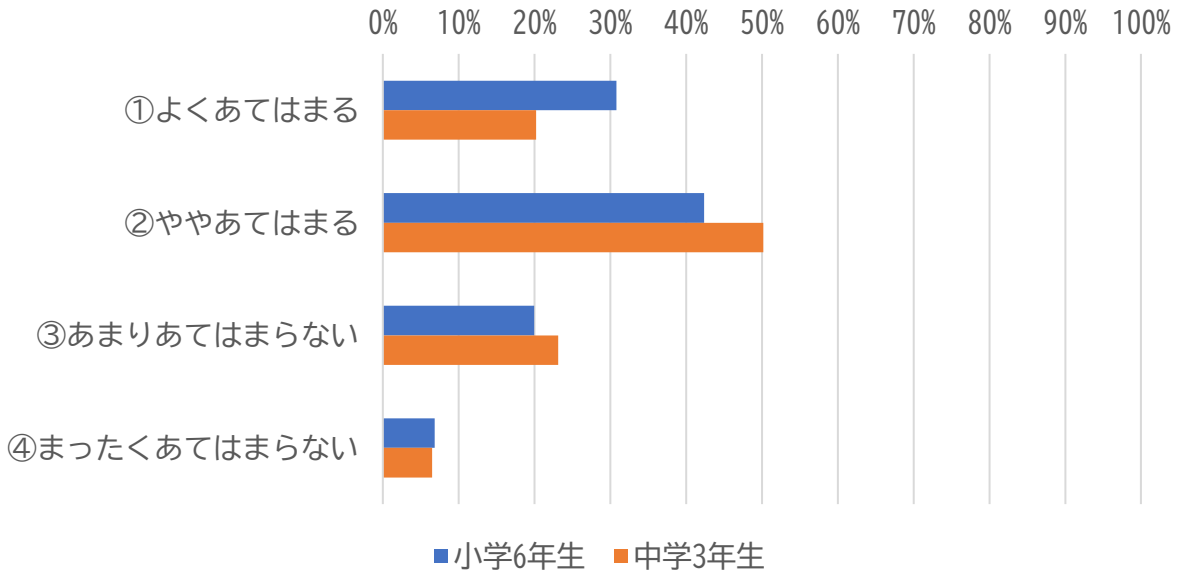
一部の児童・生徒が、身近になりたいと思うようなモデルとなる大人が存在すると回答しています。多様な人にふれ、そうした大人の背中から、学ぶ機会を学校・地域・家庭が協力して創り出していくことが、なりたい自分の姿を考え、未来を創っていく意欲につながっていくと考えます。

Q12. 今住んでいる地域が好きだ。



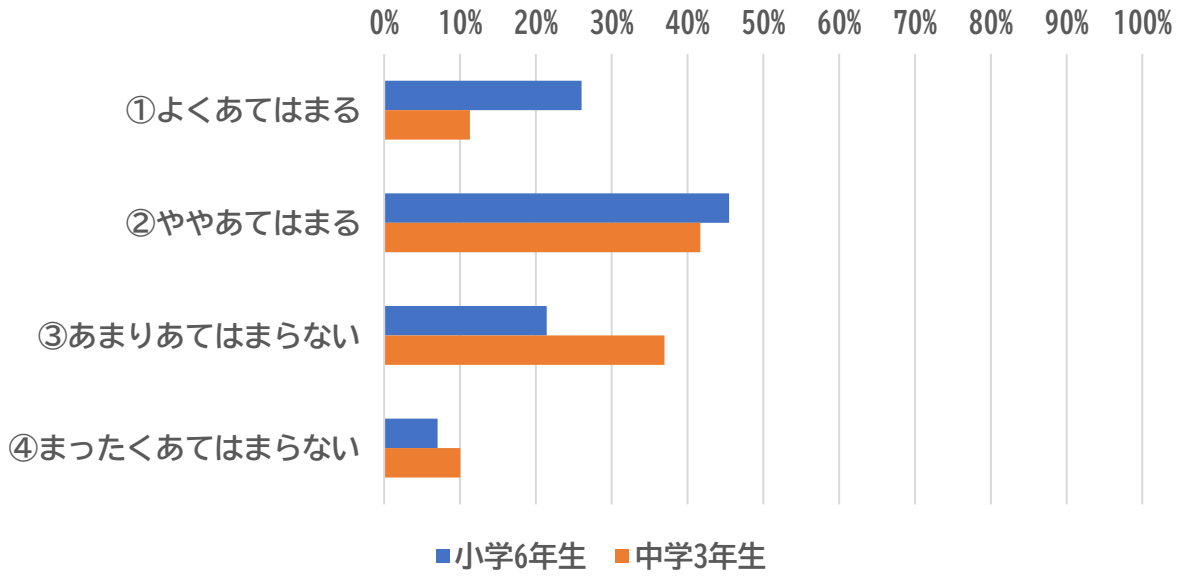
多くの児童・生徒が、今住んでいる地域が好きだと回答しています。特に小学生は、およそ2人に3人が「好きだ」と感じ、全体的に住んでいる地域に対する好感度が高いことがわかります。そうした自分の好きなまちに対して誇りを持ち、その地域の未来を担っていくのは自分たちだという当事者意識を高めていく持続的な仕組みをつくっていくことが必要だと考えます。

Q13. 大人になってもこの地域に住み続けたい。



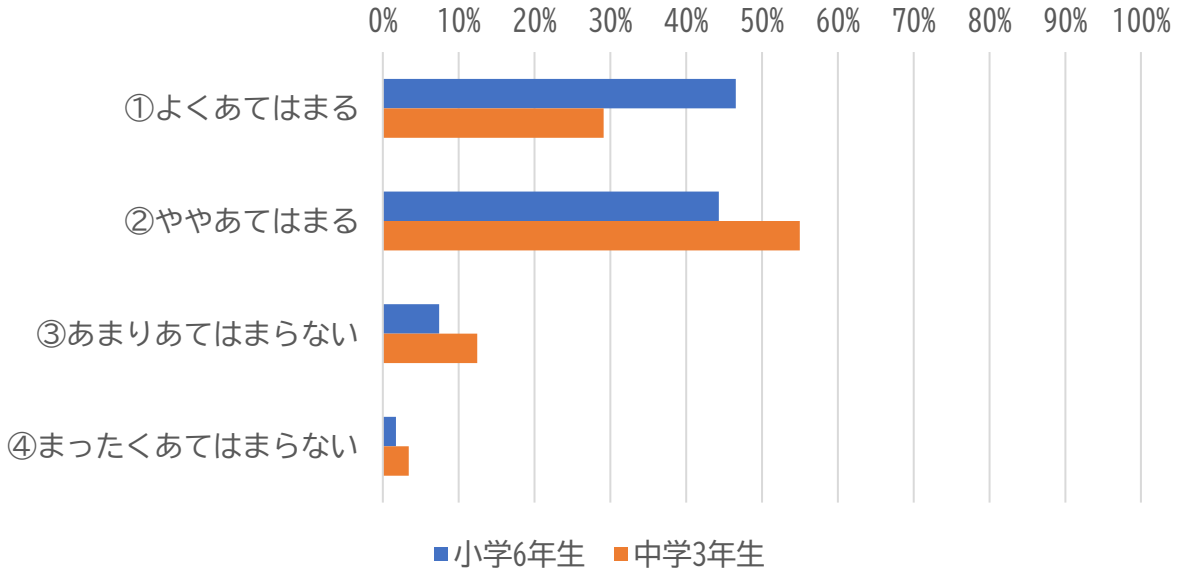
多くの子どもが、大人になってもこの地域に住み続けたいと回答しています。しかし、一方で、そうした意識が低い子どもも一定数存在します。何よりも自分が住む地域に魅力や良さを感じられるよう、地域や社会とつながっていく姿勢や地域を担っていくという当事者意識を育んでいく仕組みが必要です。そうしたことが、子どもたちの地域や社会を見つめ、関わっていこうとする力を培っていくと考えます。

Q14. 将来、自分たちの力で地域を元気にしたい。



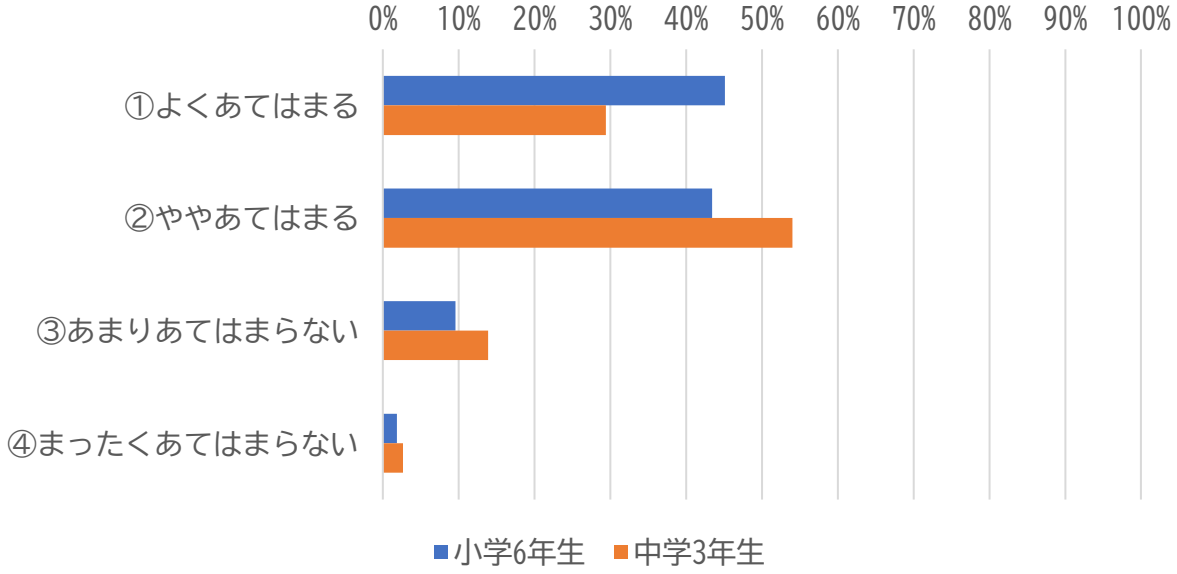
「自分たちの力で地域を元気にしたい」という意識については、小学生は肯定的な回答が多いです。それは現在地域を素材に地域の課題等を考え、地域の未来を自分たちでも考えてみるというプロジェクトに取り組む小学校が出てきていることが背景にあるのではと推測します。そうした活動を広げ、地域カリキュラムとして根付かせ、小学校で芽生えた意識を中学校でもつないでいく仕組みをつくっていくことが必要だと考えます。

Q15. 学校で学ぶ目的を理解している。



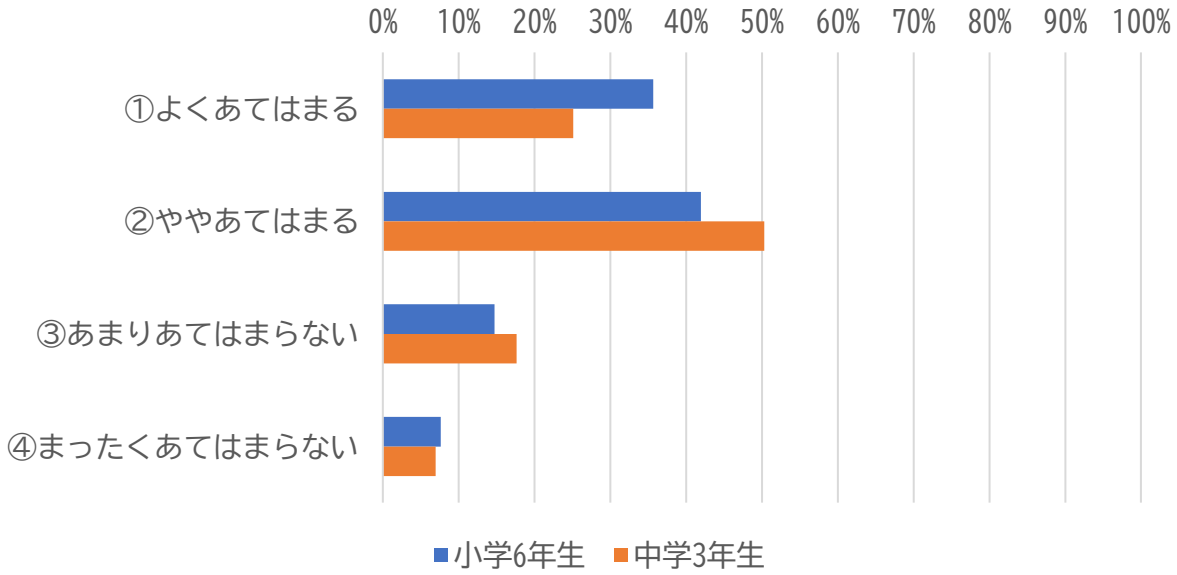
児童・生徒の多くが、学校で学ぶ目的を理解していると回答しています。
しかし、中学生の中には学ぶ目的を見失っている生徒が一定数いることもわかります。これからの社会では、学びの目的や意義をより深く理解していくことが求められる時代です。そうした学ぶ意欲を支える非認知能力がバランスよく育つ仕組みをつくっていくことが必要です。

Q16. 頑張らないといけない場面で最後まであきらめずに頑張っている。



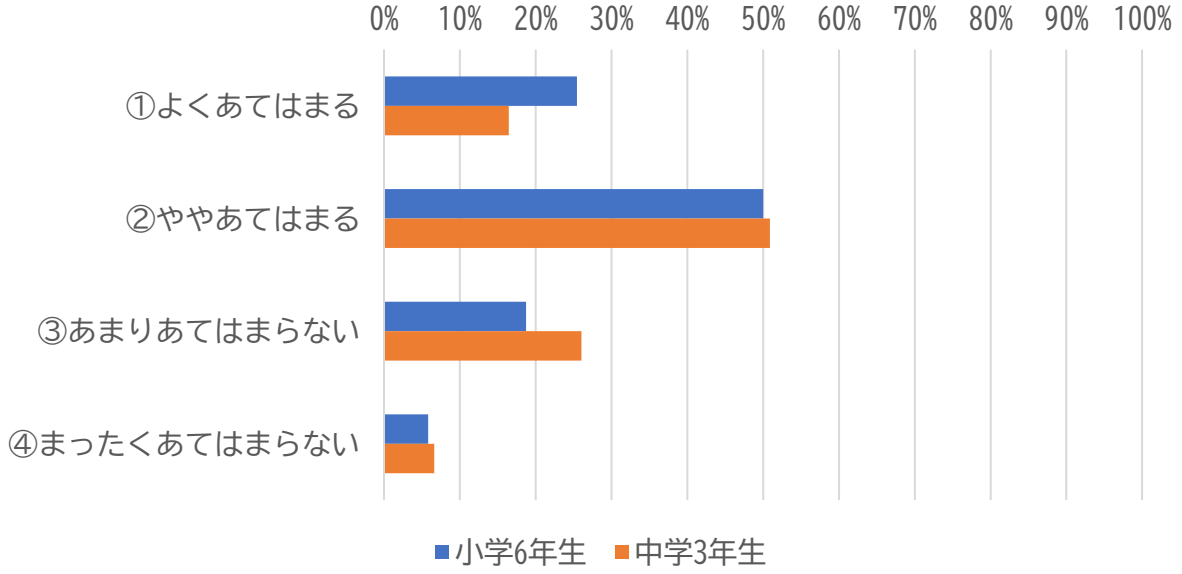
児童・生徒の多くが、頑張らなければいけない場面でも最後まであきらめずに頑張り続けていると回答しています。
つまり、児童・生徒が頑張ることに対して意識を持ち続けることや、困難に立ち向かう精神力は未来を生きる子どもたちにとって必要な資質・能力です。
学校・地域・家庭が連携・協働し、子どもたちの自己肯定感等の非認知能力が育つ環境づくりがますます大切になってきます。

Q17. 自分には良いところがある。



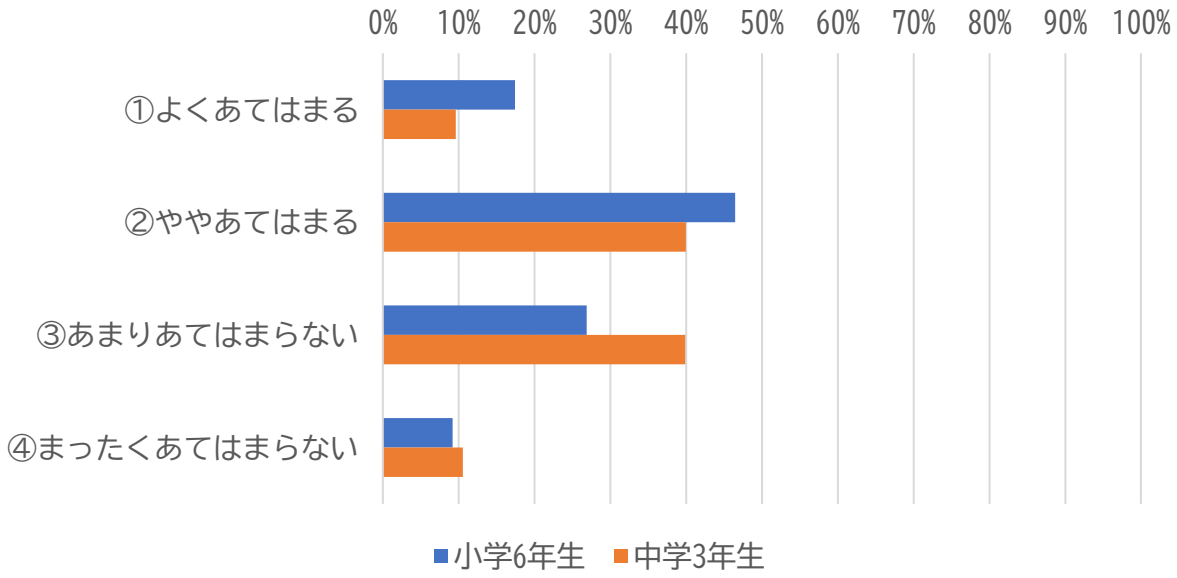
小学生と中学生の自己肯定感の違いがあり、中学生はだんだんと自分に自信をもてなくなってくる傾向があるのではと推測します。その背景には他者との比較や成績等、認知面にウエイトが置かれる傾向が影響しているのではと推測されます。これからの社会を生きていくために必要な「生きる力」を育んいくために、認知面と非認知面がバランスよく育つ仕組みづくりが必要です。

Q18. 自分は家庭の役に立っている。



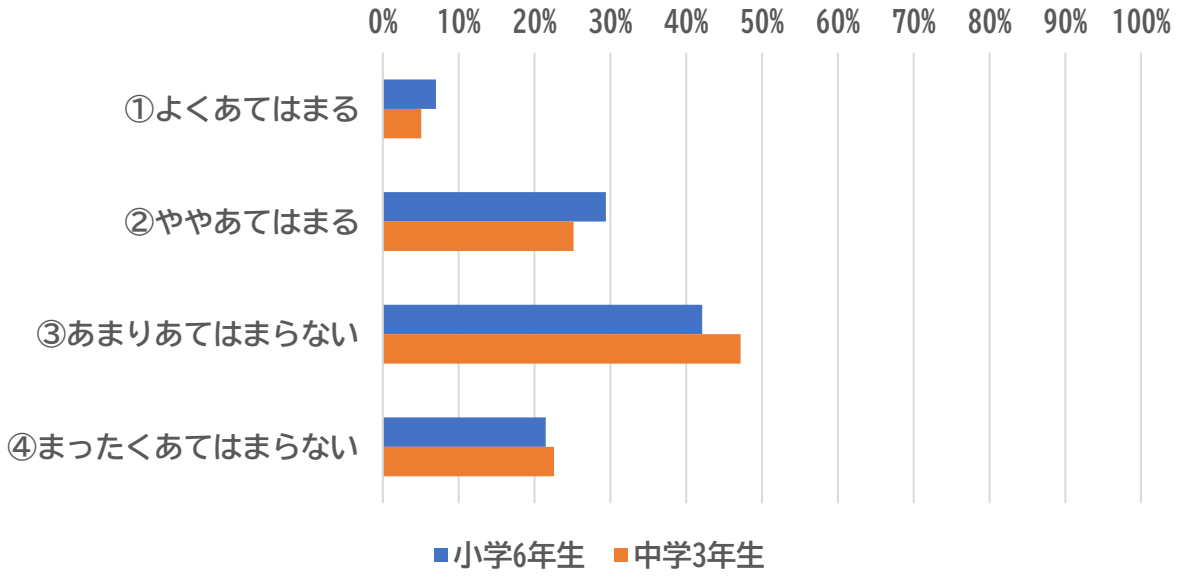
中学生は小学生と比べ、家庭での貢献意識がやや低い傾向があります。これは、年齢が上がるにつれ、学校や友人関係など他の要素に重点が置かれることや、自己中心的な思春期の特徴が影響していたり、家庭で期待される優先事項の変化もあるのではと推測されます。子どもたちの非認知能力を高めていくためにも、逆に年齢が上がるにつれより家庭や社会に貢献する満足感を高めていくことが必要であると考えます。

Q19. 自分は学校の役に立っている。



Q18「自分は家庭の役にたっている」よりも、中学生の貢献意識が低くなっています。成長するにつれ、現代社会の若者の特徴として、集団の中で目立ちたくないという意識が強くなってきているのではと推測します。同調圧力等現代社会の課題等を乗り越えていくためにも、子どもたちの非認知能力が育つ環境づくりがますます大切になってきていると考えます。

Q20. 自分は地域の役に立っている。



小学生と中学生はともに地域での貢献意識が低い傾向が見られます。このことは地域な中でのつながりが希薄になり、地域のなかで自分の役割を考える機会が少ないことが背景にあるのではと考えます。子どもたちの地域とのつながりや地域の中での自分の存在を実感させていくためには、地域を知り、地域の人・物・事から学ぶ機会を増やしていくことが必要であると考えます。

【児童生徒自由記述要約】

◎小学生の自由記述

1. ゴミ・環境問題

・公園にゴミが散らかっている、ポイ捨てが多い。
・カラスがゴミを荒らしている、ゴミ捨て場が汚い。
・川や公園にゴミが多いので綺麗にしたい。
・環境に優しい地域にしてほしい。

2. 交流・行事

・地域のイベントや交流を増やしてほしい。
・学校や地域全体での交流が少なく、他校とも交流を深めたい。
・地域全体で協力し合えるようなイベントがもっとあると良い。

3. 安全・交通

・交通ルールを守らない大人や子供がいて危険。
・通学路の安全対策（信号機の設置や交通ルールの徹底）が必要。
・通学路や坂道が危険、見通しが悪い場所がある。

4. 高齢者との共存

・高齢者が多い地域で、バリアフリー化が遅れている。
・高齢者と子供が共存しやすい地域を希望。
・誰もが住みやすい温かい地域になってほしい。

5. その他の願望

・子供向けのお店（駄菓子屋やクレープ屋）が増えてほしい。
・公園の設備や遊具を充実させてほしい。
・犯罪や事故が起こらない平和な地域を望む。

◎中学生の自由記述

1. ゴミ・環境問題

・ゴミのポイ捨てが多く、川や公園が汚れている。
・ゴミがカラスに荒らされている、ゴミ問題を解決したい。
・リサイクルや環境保護活動をもっと広めていきたい。

2. 交流・イベント

・地域の人との交流が少なく、イベントを増やしてもっと関わりたい。
・年齢を問わず、地域全体で助け合い、仲良く過ごせる場が欲しい。
・地域の行事やイベントを増やして活気のある街にしてほしい。

3. 安全・治安

・不審者や騒音問題があり、もっと安全な地域を望む。
・通学中の安全対策、信号無視する車が多くて危険。
・地域の治安を改善して、犯罪やいじめがない地域になってほしい。

4. 高齢化社会・福祉

・高齢化が進んでいるため、高齢者に優しい環境整備が必要。
・坂が多く、高齢者が移動しづらいので改善してほしい。
・高齢化に伴い、地域行事や支援が減少していることへの懸念。

5. その他の願望
・中学生や若者が楽しめるお店や施設が増えてほしい。
・ボール遊びができる公園が少ない、遊べる場所を増やしてほしい。
・川や自然環境をもっと保護して、綺麗で豊かな自然を残してほしい。

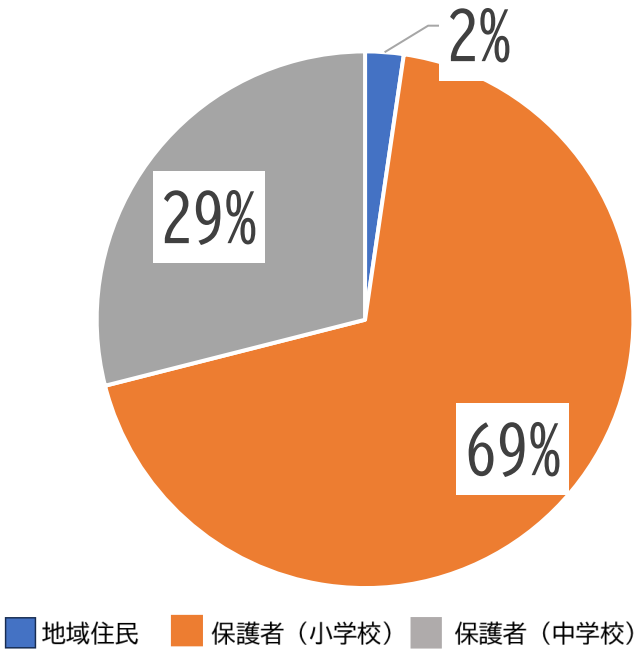
◎共通して見られるテーマ
・ゴミやポイ捨て問題
両者ともに、地域のゴミ問題への関心が高く、これを解決したいという声が多い。
・地域の交流不足
小学生、中学生ともに地域内の交流やイベントの不足を感じており、もっと積極的に地域と関わりたいという要望が強い。
・安全・治安に対する不安
不審者や交通の安全に関する不安が両者で挙げられ、特に通学路の安全が課題として挙がっている。
・高齢化への対応
高齢化社会に対して、バリアフリー化や高齢者への配慮が必要という意見が多い。

小学生、中学生の自由記述を見ると、両者ともに地域に対して第三者的な視点での記述が多く、個々の校区が抱えている特有の課題など、当事者意識に立った記述が少ない傾向にあります。
このことから、地域を知り、地域の人から学ぶなど地域とつながった学びをすすめることが必要です。そうした学びの中で、地域を見る目が育ち、地域の中で生活する当事者としての意識が高まっていくと考えます。子どもたちの当事者意識が高まることで、地域を「習う」のではなく、地域から「学ぶ」という視点に変化し、地域や社会を見つめていくことにつながって」いくと考えます。これは、未来を担う当事者としての子どもたちに必要な資質・能力です。そうした資質・能力が育つ場を積み上げていくためには、子どもの学びを単元レベルで考え、その単元のつながりをカリキュラムとしてデザインすることが必要になってくると考えます。
こうしたカリキュラムをデザインしていくために、次のような視点が必要であると考えます。
〇子どもたちの「生きる力」の育成と、「子どもたちの未来・社会の未来」を意識すること
〇「人の成長」の視点から認知面だけでなく、非認知面も意識し、両者のバランスを図ること
〇学校・地域・家庭の連携・協働をベースに、地域全体で子どもを育てるという認識を三者で共有すること
〇児童・生徒が自分の好きなまちに誇りを持ち、その地域の未来を担う当事者意識を高めていく仕組みをつくること
〇児童・生徒の意見や要望を反映させる仕組みを創ること
〇保・幼・小・中と学びと育ちの12年間のつながりを意識すること

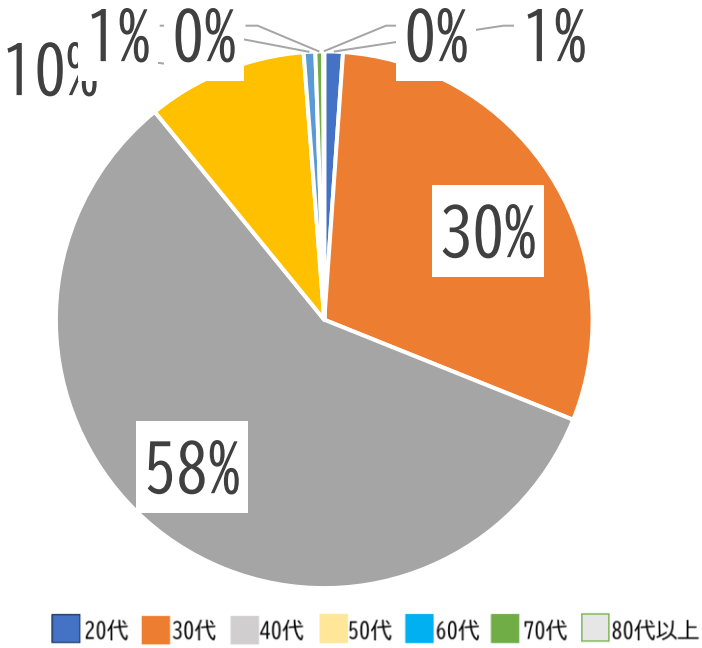
【保護者・地域】

回答者数　3593名

【あなたについて】
Q1. あなたは



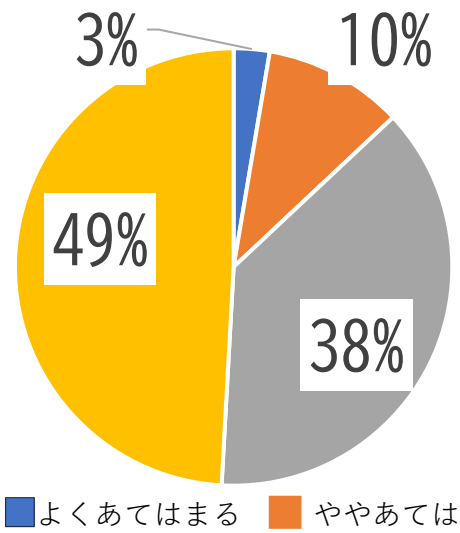
【あなたについて】
Q2. あなたの年代は



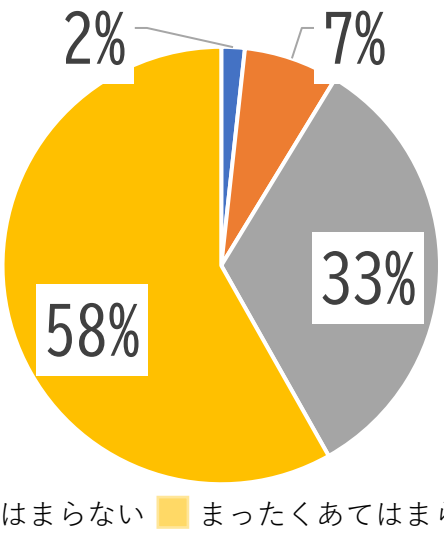
本アンケートの全回答のうち、地域住民が2%、小学校保護者が69%、中学校保護者が29%という割合で回答を頂きました。年代に関しては、20代が0.01%、30代が29.97%、40代が58.04%、50代が9.65%、60代が0.70%、70代が0.47%、80代以上が0.06%となっています。

【コミスクの推進について】

Q3. コミスクのことを知っている。



Q4. コミスクについての説明を受けたことがある。

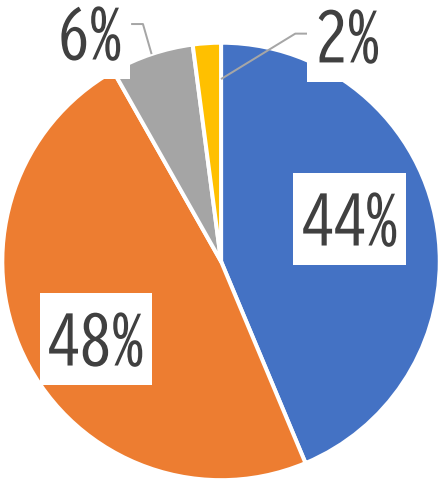


多くの人がコミスクの詳細を知らない状態であることがわかります。本市におけるコミスクの認知度はまだまだ限定的です。

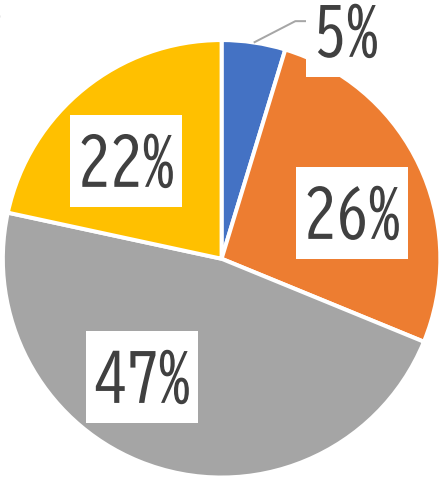
Ｑ３の結果を裏付けるように、コミスクの説明を受けたことがある人が1割にも満たないことがわかります。このアンケートの回答者の9割以上が保護者であり、学校からの説明・情報が十分行き届いていないことがわかります。
コミスクの認知度を高め、関心を広げていくためには市全体での広報、学校単位の広報や研修会を充実していく必要があります。

【コミスクの推進について】

Q5. 学校・保護者・地域住民が一体となって子どもたちを育てていくことが大切である。



Q6. あなたの地域の学校では学校と保護者と地域住民で「学校の課題、地域の課題、子どものこと、子育ての悩み等」について対話する機会がある。



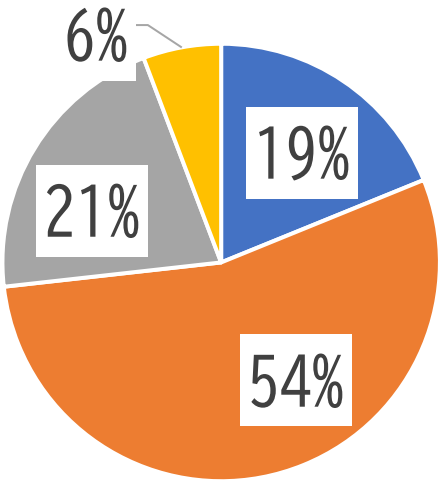
よくあてはまる　ややあてはまる　あまりあてはまらない　まったくあてはまらない

学校・保護者・地域住民が協力して子どもたちを育てることの重要性に関して、大多数の人が重要性を認識していることが分かります。
学校・保護者・地域住民が一体となって子どもたちを育てる“社会総がかりで、未来を担う人を育てる”当事者意識に高めていく必要があります。

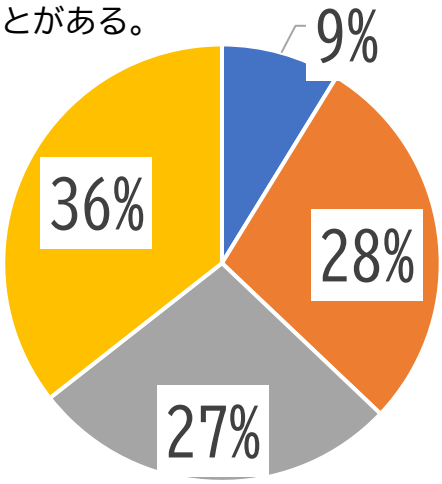
学校、保護者、地域住民の対話の機会については、多くの人が対話の機会がないと回答しています。このことから、学校と保護者・地域住民の間で認識の違いがここでも見られます。学校と保護者・地域住民との意識の差を埋めていく取組みが必要です。

【学校・地域での交流等について】

Q7. 学校や地域の行事に参加している。



Q8. ボランティアとして学校や地域の行事に参加したことがある。



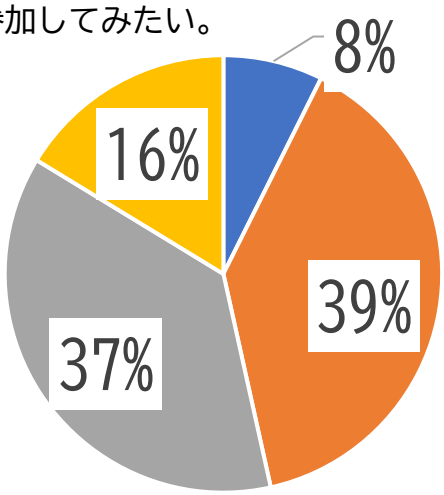
よくあてはまる　ややあてはまる　あまりあてはまらない　まったくあてはまらない

学校や地域の行事へ、多くの人が参加していると回答しています。
学校や地域の行事を通して学校づくり、地域づくりへの関心を高めていくために情報発信の仕方等工夫が必要です。

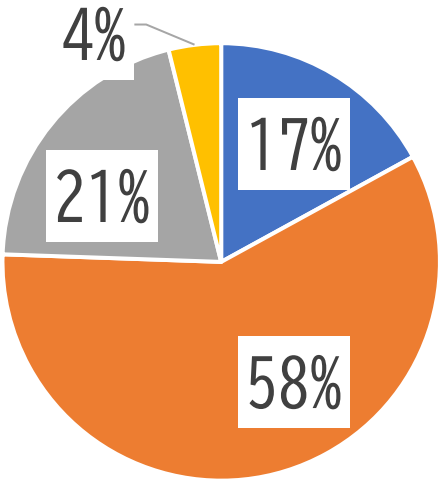
学校や地域の行事にボランティアとして全体の37%が参加経験があると回答しています。
ボランティアとして参加する人は一定数いるものの、共働き時代にあった仕組みづくりなど、まだまだ工夫の余地があることがわかります。

【学校・地域での交流等について】

Q9. 学校や地域での“この指とまれ方式（できることを・できるときに）的”なボランティア活動に参加してみたい。



Q10. 今後、地域コミュニティの役割が重要になってくる。



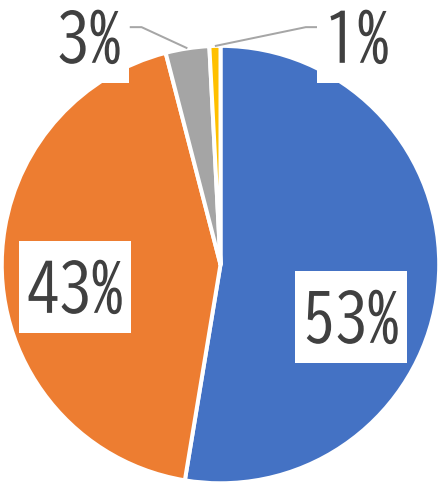
よくあてはまる　ややあてはまる　あまりあてはまらない　まったくあてはまらない

学校や地域でのボランティア活動へ参加意欲を持たれている方は一定数存在しますが、参加意欲にばらつきがあります。子どもを育てる当事者意識を高めていく工夫など、共働き家庭にも対応できる仕組みづくりが必要です。

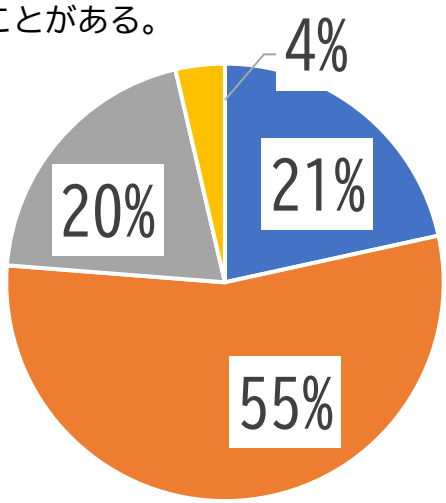
これからの地域コミュニティの役割の重要性について、全体の7割以上が重要性を認識しているが、一部の人はあまり認識していないことがわかります。
少子高齢化が進む中、防災等の取り組みを通じて人とのつながりを広げ、深めていくことが必要だと考えられます。

【あなたご自身について】

Q11. これからの時代、大人になっても学び続けていくことが大切である。



Q12. 地域コミュニティとのつながりが必要だと感じたことがある。



よくあてはまる　ややあてはまる　あまりあてはまらない　まったくあてはまらない

大人になっても学び続けていくことの重要性についてほとんどの人が大人になっても学び続けることの重要性を認識しており、多くの人が自己成長やキャリアの発展のために学び続ける意識を持っていることがわかります。こうした意識を子どもたちにも伝えていくことが必要だと考えます。

地域コミュニティとのつながりの重要性を感じた経験があると多くの人が回答しています。しかし、一部の人はあまり感じていないこともわかります。地域づくりを持続可能なものにし、地域コミュニティとのつながりを強化していくためには、対話等を通して当事者意識を高めていく等の工夫が必要です。

【保護者・地域住民自由記述要約】

1. 地域参加に関する負担

〇共働き家庭の増加

・多くの保護者が共働きで、地域や学校活動に参加する時間がない。特に平日の行事やボランティア活動の参加が難しいとの意見が多い。

〇負担感

・一部の人に活動が偏る傾向があり、負担を感じる保護者がいる。また、役員やボランティア活動が「強制的」と感じられることが負担に繋がっている。

2. 学校・地域・家庭の連携の重要性

〇情報共有の不足

・学校、地域、家庭間での情報共有が不足しているという意見が多く、もっと密接な連携が求められている。

〇見守り活動の強化

・子どもたちの登下校や公園での安全を守るため、地域による見守り活動の継続や強化が必要とされている。

3. 地域行事・ボランティア活動

〇参加しやすいイベント

・親子で参加できるイベントや、負担が少ない形式のボランティア活動が求められている。特に休日に開催されるものや、気軽に参加できる場の拡充を望む声が多い。

〇ボランティアの役割

・地域のボランティアによる教育支援や見守り活動が評価されている一方で、強制的に参加させられることへの不満もみられる。

〇柔軟な参加の求め

・ボランティア活動は「できる時にできる人が参加する」柔軟な方式が望まれており、強制感が負担となっているため、改善が必要という声が多い。

4. 地域との交流・つながり

〇交流機会の不足

・地域住民間の交流機会が少なく、イベントの増加や、住民間のつながりを深める取り組みが求められている。また、転入者や若年層が地域に溶け込むのが難しいという課題も挙げられている。

〇顔の見える関係の重要性

・地域内で顔見知りが増えることで、防犯や有事の際に役立つという意見がある。特に、災害時や緊急時の助け合いが期待されている。

5. 子どもたちの成長支援

〇多様な教育の必要性

・子どもたちの教育には、学校の制度に縛られない多様なアプローチが必要だとされ、特に地域資源を活用した学習や居場所づくりが提案されている。校内フリースクールのような柔軟な環境が求められる。

〇子どもの安全

・地域全体で子どもたちの安全を見守る意識が大切だという声が多く、登下校の安全確保や、災害時の対応強化が求められている。

〇子どもの自立支援

・異学年の交流やボランティア活動への取り組みが求められている。

〇地域との連携

・地域の大人たちが学校に関与する機会を増やすことで、子どもたちがさまざまな経験を積むことができる環境を整える必要があるとの意見がある。また、地域での学びや遊びの機会を増やすことも重要とされている。

6. 地域コミュニティとイベントの提案

〇地域交流の場

・カフェやイベントなど、気軽に集まれる場所の設置や、世代を超えた交流ができるイベントが必要だとの声がある。また、若い世代が参加しやすい柔軟なイベントの企画が求められている。

〇子どもと大人の共同イベント

・子どもたちが地域の大人と一緒に楽しめるイベントを通じて、コミュニティを強化する提案があり、親子で地域に関わる機会が増えることが期待されている。

7. PTAや自治会活動への意見

〇PTAや自治会の活動改善

・PTAや自治会の活動が時代に合わなくなっているという指摘が多く、もっと効率的で負担が少ない形への見直しが求められている。特に、活動の強制感や古い慣習が負担となっているとの声が多数。

〇地域コミュニティの役割

・地域の自治会活動が一部の熱心なメンバーに依存しているため、全体に参加意識を持たせる仕組みが必要という意見がある。

8. 学校と地域の連携について

〇学校の取り組みの透明性

・学校運営協議会の内容や予算の公開を求める声があり、学校と地域の連携を強化し、地域全体で学校を支える体制の構築が必要とされている。

〇不登校や特殊な教育ニーズ

・学校制度に合わない子どもや、不登校の子どもたちにも対応できる柔軟な学びの場や、子どもの居場所づくりが必要とされている。

9. 共働き家庭の特有の課題

〇家庭内の負

・共働き家庭では、家庭内でのコミュニケーションや教育に関する時間が不足しがちで、子どもへのサポートが難しくなるという意見が多数ある。特に、宿題や学習のサポートをする時間がないことがストレスとなっている。

〇地域の理解とサポート

・地域全体が共働き家庭に対する理解を深め、柔軟なサポート体制を整えることが必要であるとの声が強い。たとえば、子どもたちの活動を支援するために、地域のボランティアやサポートを積極的に活用する提案がある。

10. 地域環境の整備と安全性

〇安全な通学路の確保

・子どもたちの通学路の安全性に関する懸念が表明されており、特に交通量の多いエリアでの事故防止策や、歩行者の安全を確保するための取り組みが求められている。

〇地域環境の美化

・地域の環境整備や美化活動が重要視されており、子どもたちに対してマナーや常識を教育するための取り組みが必要とされている。また、ゴミのポイ捨てを減らすための啓発活動も必要とされている。

11.情報共有とコミュニケーションの促進

〇情報共有の重要性

・地域の情報や学校の活動についての共有が不足しており、保護者が情報を得やすくするための仕組みが求められている。特に、SNSやアプリを活用した情報発信の重要性が指摘されている。

〇自由なコミュニケーションの場

・保護者や地域住民が気軽に相談や意見交換できる環境が必要であり、そうした場を提供することが求められている。また、コミュニティ活動に対する参加のハードルを下げる工夫が必要だとの意見もある。

12. 地域文化と多様性の受容

〇地域文化の多様性

・地域住民のバックグラウンドや価値観の違いを受け入れる姿勢が重要であり、異なる世代や文化の人々が共存できるような地域社会の構築が求められている(保護者・地域住民編原本)。

〇互いの理解と協力

・地域住民間での協力や助け合いの精神を育むことが重要視されており、地域イベントを通じて顔の見える関係を築くことが提案されている。

保護者や地域の皆さんの自由記述から
地域参加の課題として、
〇地域参加の負担感
〇学校と地域の連携強化の必要性
〇子どもたちの安全確保
〇多様な教育環境の整備
そして、これらの課題に加えて
〇共働き家庭の課題
〇地域の未来に関する課題
といった課題があげられています。

共働き家庭が主流になるなど社会の変化に関わるこうした課題は、これまでの仕組みでは対応しきれず、新たな仕組み作りが必要です。そのためには、地域・学校・家庭の三者による柔軟で多様なアプローチが生まれる対話の積み重ねが重要です。明石市が目指すコミスクは、これからの変化の激しい社会の中で、社会の変化に対応し、地域みんなで子どもを育てる新たな社会の仕組み作りを目指しています。

まず、各校区に対話を広げていくとともに、コミスクの理解と浸透を図るための啓発・広報活動が必要です。「komikomisukusuku」での情報発信を充実させるとともに、校区での説明会や大規模なフォーラムなどを通じ、コミスクを通して「未来を担う人を育てる」当事者意識を広げていくことが求められています。

〇2024明石のコミュニティ・スクール

〇コミュニティ・スクールだより

〇明石のコミュニティ・スクール（YouTube）

〇明石のコミュニティ・スクール（X）